

---

# 麻帆良に忍！

XYZ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

麻帆良に忍！

### 【Nコード】

N14070

### 【作者名】

XYZ

### 【あらすじ】

インチキ忍者が麻帆良で色々やる話。多分にご都合主義でテンプレ。アンチなしの予定。ヒロインは楓です。

## 第一巻：拙者、ニンジャでござる。の巻（前書き）

気分転換の新作でございます。

あらずじ通り、インチキ忍者が麻帆良で色々やる話。

アンチとかそういうのは無い予定。ご都合主義でテンプレ通りやります。

ヒロインは楓。

## 第一巻：拙者、ニンジャでござる。の巻

甲賀中忍・長瀬楓が『彼』と出会ったのは、まだ小学校の頃。

その頃は彼女も麻帆良におらず、山奥にある忍者の隠れ里にて修行中の身であった。

最も、それでも彼女は歴代最年少の中忍・甲賀における最高位・になるだろうとして

注目の的であり、彼女自身もそうなるべしと慢心する事無く修行に打ち込んでいたのである。

そんな夏のある朝の出来事。

鬱蒼と繁った山林にて朝食を調達していた彼女は、歩いている1人の少年を見かける。

身長は自分より低い、自分の身長が同世代と比べて高いのは自覚している為、

年齢までは判断できない。

ただ、顔つきを見ればまだまだ子供であり、品のよさが見られる節がある。

服装は大よそ山登りに適した格好とはいえず・何しろ、どう見ても普段着だ！・

背中に背負ったバックパックがなければ迷子か何かかと勘違いしてしまいそうである。

いや、実は遭難してる可能性も捨てきれないが、それにしても落ち着き払っている。

詰まる所、『彼』は自分の意思でここまで歩いてきたのであろう。それだけでも感嘆するべき事であると彼女は関心する。

ここから一番近い村でも普通ならば一日がかり。  
更に言うならば、この辺りは既に隠れ里の領域内に入っているの  
である。

つまり、侵入者撃退用の罠が張り巡らされているという事。

勿論、ただの登山家などが迷い込んでしまつて大惨事を引き起こさ  
ないよう、最初の方は

それほど深刻な罠を張り巡らしている訳ではない。だが、この辺り  
ともなれば足の一つ、

腕の一つは覚悟しなければならぬような罠も混ざつてきているの  
だ。

それにも関わらず、『彼』は見たところ擦り傷などはあるものの大  
怪我を負つた節は無い。

となれば、何らかの手段を持つて潜り抜けてきたのだろう。

「さて……………どうしたものでござろうな。」

誰とはなく呟く彼女。

ここまで近づいてきた以上、ただの登山客とは思えない。

ただ、侵入者と言うには殺気などがなさすぎる。

自分が知る限り、取り立てて隠れ里に後ろ暗い所は無いはずではあ  
るが、

どこで恨みを買われてるか分からないのが忍者と言う職業（？）で  
ある。

もしかすれば、斥候の類の可能性も捨てきれない。

木の枝の上で悩んでいると、少年から声をかけられた。  
声変わりもしていない声だ。

「おい、そのためえ。いつまで人の事じろじろ見てやがんだ？」

気づかれていた!?

驚愕する彼女。それでも気配の消し方は隠れ里でも1、2を誇る。彼女がその気になれば、野生の動物すらも騙しきるだけの隠行術を行使できるのだ。

だが、こうなつては不審者度が上昇するのやむを得ず。

手持ちの武器だけでは心許ないが、そもそもここは自分の庭のような場所である。

イニシアティブはこちらにある。そう思った彼女は姿を晒さずに声をかける。

「いやいや、まさか見つかるとは思っていなかったでござるよ。

これでも隠れる事に自信はあったんでござるが。」

「はっ、安心しろよ。オレも気が付いたのはついぞさっきだ。いつから見張つてやがった?」

「ふむ、見張られては困ることでもあるのでござるかな?」

少年は立ち止まった状態のまま、じつと動こうともしない。

「いいや、全くと言って後ろめたい事なんて無いけどな。

ただ、ストーカーみたいに付きまとわれるのは勘弁な、と言いたいだけさ。

で……人っ子一人いないはずの山奥で声をかけてきたてめえは何だ?天狗か?忍者か?」

「む……………」

確かにその通りである。

まだまだ修行が足りないでござるなあ、と自戒しつつ彼女は反論する。

「しかし、いきなり天狗と忍者の二択はないんじゃないでござるか

な？

善良な一般市民の可能性もあるでござるうて。」

「ばーか、善良な一般市民が木の上で気配隠して立ってるものか。冗談も休み休み言えよ。」

「ふむ………それもその通りでござるな。されど、山の民にとってこの程度は常識でござる。」

「OK、そろそろこの問答も面倒になってきたから単刀直入に聞かぜ？お前忍者だろ？」

いつまでも続く問答に飽きたかイラついて来たか、少年が質問の方向を変える。

「ふむ、いきなり断定されても困るのでござるが………」

「ふざけんなよてめえ、ござるござる言ってて忍者じゃないってならそっちが詐欺だ。」

「仮に拙者が忍者として、どうするつもりでござるかな？」

返答次第では、ここで一戦も想定する必要がある。

静かに、気取られないように身構える彼女。

一方の少年は自然体。

「この辺に忍者の隠れ里があるって聞いてな、案内してくれると嬉しいんだけどよ。」

流星にこの罠の数は通るのに苦労したぜ………」

まさか天然の結界まであるとは、さすが忍者と感心する少年。

だが彼女としてはそれどころではなかった。

隠れ里が見つからないのは前述の罠の前にある、その『結界』のお陰ともいえる。

もつとも前述したように100%何者も通さないわけでは無いのだ

が……

意図的に乗り越えるならば、相当な労力を覚悟する必要がある。

「して、如何なる用事でござるかな？」

「言うつか、お主は分かつてながらさっきの問答を吹っつけた訳でござるな？」

「当たり前じゃねえか、本当に天狗だったらどうするんだよ。

で、用事はそう難しい事じゃねえ………ちょっとした武者修行つてやつだ。」

「ほう………」

感心しながらも同時に呆れる彼女。

今時武者修行などとは、いつの時代に生まれたんでござるか、彼は。などと思いつつ。

「では、まずは拙者がお相手するでござる。」

「おいおい、マジか？」

「まさか、女は殴れないなどと言わないでござろつな？」

少年は困った様子もなく頭を掻いて一言。

「……………いや、もう決着付いてるしよ。」

「何を……………」

そこまで言いかけて、身体の異変に気が付く。  
全身の力がまるで抜けていくかのような感覚。

「毒……………でござるか。」

「『忍法・彼岸花』ってな。ちよつと無色無臭の神経に作用する薬品を空気に流しただけだ。」

風なんかであっさりご破算になるような代物だよ。心配すんな、命まではとりやしねえよ。」

「それでも……毒の耐性はつけておるんでござるが……」

そこまで言って、立っていられなくなり下へと落ちる彼女。

地面に激突する瞬間に少年が抱きかかえ、そして彼女をそっと地面に横たえる。

「幾ら毒の耐性だったって地球上全ての毒ってわけでもねえだろうしな。

オレだって網羅しきってねーよ。と言うか、普通はこの術喰らって喋れねえよ。

ま、取りあえずこいつ飲んどけ。解毒剤だ。」

そう言ってズボンのポケットから包み紙に入った粉薬を取り出す。

「拙者、動けないんでござるがなあ……」

「あ、わりい。」

普通ならば毒殺の可能性も疑うべきであろうが、流石にここでそれは無いだろう。

そんな手間を掛けなくても、幾らでも殺す手段は存在する訳で。

「ま、口は動くみたいだから流し込んだら問題ねえな？」

「……口移しでござるか？」

「して欲しいのかよ？」

そんなおバカなやりとりをしつつ、数分後には無事に動く楓の姿があった。

軽く身体を動かしながら、少年に尋ねる。

「それでお主、忍者なのでござるか？」

「あー、一応忍者って事になるんじゃないの？うちの爺さんもそう言ってたしよ。」

「いや、忍法と言ってる以上は忍者じゃないと言い出したら詐欺でござろう、それは。」

それもそうだな、と笑う少年。

この時だけは歳相応の笑顔に見えた、と後に彼女は語る。

「で、案内してくれるんだろう？忍者の隠れ里。」

「勝負に負けたのは拙者でござるからな。少なくとも悪人にも見えぬし、案内するでござるよ。」

しかし、この流れにならなければどうするつもりでござったか？

どう考えても薬を撒くタイミングを考えれば、自分と話をしているときである。

そう彼女に問われて、困ったように頭を掻く少年。

「あー……勘だ。」

「は？」

「だから勘だよ。こいつは戦闘になるな、と思って事前に撒いておいた。」

「ーじゃねえかよ、結果オーライなんだからさ。」

そつぽを向きながらそういう少年に、彼女は思わず呆れてしまった。意外と出たところ勝負でござるな、と。

「まあ、確かに済んだ話でござるし一向に拙者も構わん訳でござるが……。」

お主、名前は何と言うでござるか？」

「人の名前を尋ねる時は、まず自分の名前を先に名乗る物。オレはそう聞いたぜ？」

確かにその通りと言えばその通りである。

そして、彼女の名乗りを聞いてから、少年は名乗った。

最も、この時は長い付き合いになるなどとは思っていなかった彼女ではあったが……。

「駒井翔太。特に流派は無いが、一応忍者だ。改めて宜しくな」

そして、時は過ぎ舞台は麻帆良学園都市へと移る。

麻帆良より少し離れた山中にて。二つの影が動いていた。

一つは忍び装束を着た長身の女性、もう一つは私服のままの小学生のように小さい少年。

木々を渡りぶつかり合う二つの影の實力は、大よそ拮抗していると  
いって良い。

ただし、戦力比は16:1。女性が16で少年が1である。

影分身。女性・長瀬楓・が得意とする忍術であり、実体と同じ密度  
なら6体まで作成可能。

こうも密度がある分身を作る事が可能となったのも、少年・駒井翔  
太・との訓練成果である。

最も、彼自身は全くと云っていいほど影分身の類は使えないのでは  
あるが……。

「何でそんな事が出来るんだよ。」

と言うのが翔太の主張である。

本来分身の術とは高速移動による残像を見せる事により、相手をかく乱させる術だと。

しかし、楓は思っただ。

「（何故あそこまでやっておいて、これが出来ないのかが不思議で仕方ないでござる。）」

と。どうして彼女がそう考えるのか？それは……

「だあつ、鬱陶しいっ！！ 一気に決める！『忍法・疾風怒濤』っ！！」

いい加減16対1と言う戦力差に嫌気が差したのか、翔太は両手を左右に広げると独楽の様に

高速回転。まるで重力など無いかのように自在に空を駆け、次々と分身たちを撃墜していく。

その回転が終わった時、本体を残して全ての分身が全滅していた。

「しかし、いつ見ても非常識極まりない忍術でござるな………本当に忍術でござるか？」

「何言つてやがる、前にも言っただろうが。『ファンタジーな忍術』だつてよ。」

そう嘯く翔太。

どうやればあんな動きが可能なのか？楓には見当がつかない。だからこそ影分身ができないのが不思議でしょうがないのだ。一度だけ、その忍術はどこで習ったのかを聞いたことがある。

「あ？うちの爺さんが忍者でな。オレに才能があるつつつて叩き込んで逝きやがった。」

親父もお袋も『忍者なんて今時流行らないから止めときなさい』って反対してるんだけどな。」

とは言え、もう馴染んじまってるし今更捨てられねえよ。

と語った時の翔太の顔は、どこか遠い風景を思い起こすようであった。

この麻帆良に来たのも親の干渉をはねのける為だとか何かの話の流れで聞いた事がある。

「で、どうするよ？　ここで終わるか続けるか？」

「そんな決定権がお主にあるでござるかな……………」

再び流れ出す緊迫した気配。しかし、それもすぐに霧散した。

「ふう……………今日の所はここで止めにしておくでござるよ。」

「だな。いい加減俺も帰らないと明日がやべえ。」

そう言っただけで、構えを解く。

「しかし、やっぱり影分身は習得した方がいいと思うのでござるが……………」

「るせえよ。わかんねーしできねーもんに手を出すなら、自前の技を鍛えた方が建設的だぜ。」

まあ、対人で加減して使える忍法の方が少ないと言うのが困った話なんだがな。」

そう言っただけで掻いていない汗を拭い、頭を掻く翔太。

昔からちっとも変わってない光景だ、と楓は思うが口には出さない。

初めて出会った時から全く身長が伸びないのは、彼女から見ても気の毒の一言である。

身長どころか、顔つきまであの頃と殆ど同じ。

ぶっちゃけてしまえば、小学生料金で公共施設などを利用できるレベルだ。

……まあ、潜入工作となると小さい方が便利なのだが。

「確かにそうでござるなあ。駒井殿の忍術？は殺しあうにしても物騒すぎる術。

少なくとも、人間に向けるにはちと過剰すぎる火力もあるでござるからなあ。

一体『何』にその力を振るわせるつもりで駒井殿の祖父殿はそれを教えられたのでござろうか？」

「人の忍術を疑問系にするんじゃないよ。

と言うか、名字で呼ぶなつつたろうがこのバ楓。後ろ髪引つ張るぞコラ？

……まあ、爺さん曰く『人でなしに振るう忍術。その時が来れば分かる』だそうだが。」

あの時「天狗か？」と言う選択肢があつたのもその為なのであろうか、と楓は思う。

もつとも、仕事人よろしく法で裁けぬ悪を討つ可能性も無きにしも非ずだが……。

「てか、来てもらわねえと俺が困る。でないとあの地獄の幼年期が浮かばれん。」

「……………難儀してたでござるなあ。」

遠い目をしてそう語る翔太。

あの武者修行も死んだ祖父の遺言だったようである。

最も、「知りたい事は本当に墓場まで持って逝きやがった」そうでもあるが。

「本当にそんなのと出会ったら是非教えて欲しいでござるよ。拙者も多少興味があるでござる。」

「馬鹿言ってるじゃねえ、お前にそんな危ない奴とドンパチさせられるかってんだ。」

と言いかだ、お前ほんとに忍者隠せてるのか？その口調で？」

そつぽを向いて無愛想に翔太は拒否するが純粹に楓のことを心配し  
てのこと。

それがわかっているの、楓も話の転換に乗っかる事にする。

「無論でござる。拙者の偽装は完璧でござるよ、にんにん。」

「嘘ぶっこきやがれ。ござるござる言ってバレねえわけがねーだ  
ろうが。」

実際の所、楓は同室の鳴滝姉妹に初歩の初歩レベルで教授してたり  
するが。

「さて、そろそろ本気で自室に戻らないとバイトがやばい。」

今から帰ったら………1時間ほどこしか寝れねえじゃねえか。」

「ならここで泊まっていくでござるか？ 今なら拙者と一緒に寝れ  
るでござるよ？」

指折り数えて確認してげつ、と言う顔をする翔太に提案してみる楓。

「ばーか、それこそ間に合わなくなっちまう。それにそう言つのは  
結婚してからだっつーの。」

「相変わらず妙な所で古風なんでござるな。というか、何故間に合

わなくなるでござるか?」

ふと気が付いてにやりと笑みを浮かべる楓。  
しかし、翔太は動揺することもなく言い放った。

「そりやお前……………一緒に寝るとか俺が我慢できなくなるからに決まってるじゃねえか。」

「っ!?!」

余りにも全力ストレート過ぎて逆に顔が赤くなるのが分かる。  
言った本人もその事に気が付いたか、真っ赤な顔だった事を追記しておく。

「じゃ、そろそろ行くぜ。またな、楓。」

「また明日……………今日でござるがな、翔太殿。」

そう言つて、忍は去つてゆく。木々を渡りながら。  
それを見送つてから、彼女も眠る事にする。

いい夢が見れることを願つて。

これは、ある1人の忍者の青年の物語。

『英雄の息子』が彼と出会つのは、まだ先の話……………。

## 第一巻：拙者、ニンジャでござる。の巻（後書き）

> 山奥の

勿論そんな設定はございません、でっち上げました（えまあ、山奥で育ったことは間違いないんですけどね。

> 中忍

この頃は彼女は中忍になっておりません。

小学校卒業と同時に中忍になり、麻帆良に行かされたと当作品ではしております。

どっかの最年少魔法先生と同じような理由ですね、きっと（え。あるいは「世界は広いから見て来い」みたいなw

> どこで恨みを

モノホン忍者なら何らかの作戦活動には従事しているだろう、と言う考えです。

産業スパイとか、諜報活動とか。

にしては、最高位の中忍である楓でも裏の世界には疎かったと言えるわけですが……

恐らくは楓には知らされてなかったと言う事でしょう。知る前に麻帆良に来たでも可。

> 6体

原作では4体ですが、当作品では修行の成果により6体まで可能となっております。

更に言えば、16体は上限ではございません。

あくまで、動かしやすいのが16体と言う事になっております。

> 忍法・疾風怒濤

ゲルマン忍法とは全く関係の無いことをここで宣誓しておきます（え

10 / 6

キャラ名の変更。 よそ様ともろ被りでございました。

12 / 6

ちよろつと訂正したり。

と言うか、キャラ名直したはずが直ってなかった。 死にたい。

## 第二巻：バイトと猫とストーカーでござるの巻（前書き）

お待たせしました、第2話でございます。

別名、原作介入フラグ構築ターン（え

ちよろっただけせっちゃんに敵しいかも。

## 第二巻：バイトと猫とストーカーでござるの巻

麻帆良学園女子中等部2・A・出席番号8番、神楽坂明日菜が彼と出会ったのは1年の頃。

生活費と学費を稼ぐ為にアルバイトをする事になった明日菜。

その彼女と同時期にバイト先に入ってきたのが彼 - 駒井翔太 - である。

最初に見た時は、どうしてこんなガキンチョがと思ったものだ。同学年と聞いて平謝りしたが。

何しろ、クラスメイトの鳴滝姉妹と同じような身長しかないのだ。間違えた明日菜に罪は無い。

後に、彼自身は相当気にしているらしいと明日菜は知ることになる。

ある時は「なあ、ぶら下がり健康法って本当に背が伸びるのか？」と真面目な顔して聞かれ、

またある時は牛乳1パックを一気飲みする姿を目撃し。

涙ぐましい努力は傍から見ても同情を誘う姿である。

小学校の頃からやっているのと知って（そして成果が全く上がらなくて）

なおさら泣いたことは言うまでも無い。

ふとある時、明日菜は尋ねてみた事がある。

「ねえ、翔太。なんでそんなに身長が欲しいの？」

と。何故明日菜が彼を名前で呼ぶのか。無論、二人が深い仲な訳ではない。

彼がそう呼べ、と言ったからだ。

「名字で呼ばれるたびに『こいつ本当に小さい』って顔に浮かぶのを見る気持ち分かるか？」

本当なら名前だって改名したいくらいだぜ……………」

と言うのが彼のその時の主張。

その日以来、明日菜は彼を名前で呼ぶことにしている（呼び捨てなのはご愛嬌、と言う奴だ）。

そして、身長に関する彼女の質問に彼はこう答えた。

「許婚の身長がオレ以上でな…………… かつこつかねえじゃねえか。色んな所だよ。」

意外と見得張りと言うか、許婚とはいきなりぶっ飛んだわね、とは明日菜の感想。

彼女とて、人の色恋沙汰に興味が無いと言えば嘘になる。

「へえ、どんな子？」

「写真あるけど見るか？」

そう言つて、翔太は定期入れに仕舞つてある写真を取り出して見せる。

どこかの自然溢れる村の一角で取つたと思われる写真。

この頃から身長全く変わらないんだ、などと明日菜が失礼な事を考えたのは一瞬。

その彼の隣で微笑む相手を見て思わずええー！と叫んでしまった。

そこに写っているのは、どうみてもクラスメイトの長瀬楓だったのだから。

「どうしたよ、いきなり？」

「だ、だってまさかうちのクラスの長瀬さんとか普通想像しないじゃない！」

「それもそうか……………ってか、同じクラスかよ！」

思わぬ繋がりにびっくりする翔太。

そんな彼に、明日菜は気になってた事を聞いてみることにした。

「ねえ、こんな事聞くのもなんだと思うんだけど……………長瀬さん、  
って忍者？」

「……………何でそう思ったよ。」

「だって、ほら。『ござる』とか『にんにん』とか言ってるじゃない。

本人に聞いても何のことでござるかな、って煙に撒かれるだけだし……………」

思わず頭を抱えそうになる翔太。「あのバ楓……………」と呟いた声は彼女には聞こえず。

「本人が話したくないって言うなら、オレがとやかく語る事でもねーだろ。」

その気になりやいつか話してくれると思うぜ。オレはな。」

「ま、それもそうよね。それで、どういう馴れ初めで許婚とかなってるの？」

「……………何だ、神楽坂もそういう事には興味あんのか？」

「どういう意味よ、それ……………」

思わずジト目で睨みつける明日菜。

繰り返すが彼女とて女である。色恋沙汰に興味が無いと言えば嘘になる。

ましてやクラスメイトの事なら尚更の事。

「まあ、なんつーか。あいつの故郷に行った時にあいつと出会ったのが始まりでな。」

んでもって、向こうの家の人に気に入られてな。その流れで婚約って形になったわけだ。

勿論、オレもあいつもお互い納得済みでだぜ？」

彼の言っている事は大よそ間違っていない。

（武者修行で）楓の村に行つて出会い、（そこで忍者としての才を見せて）向こうの家の

人に気に入られたのだから。もっとも、人格的にも問題が無いからこそその許婚なわけだ。

「へえ、それいつの話？」

「えーと……去年じゃねえ、一昨年の話だな。」

「一昨年って、まだ小学校じゃない!!」

「いいじゃねえか、許婚とか決める事に年齢なんか関係ねーよ。つか、許婚って決まつてる

だけで別に疚しい事はしてねーぞ？」

「そ、そうなんだ……」

楓からは「鋼の自制心でござるな」と言われるくらいである。

最も「結婚したら幾らでも可愛がつてやるよ」等と言い返してお互い赤くなってしまうのだが。

そもそもにして二人はまだ中学生。

確かに忍者、それもクノイチと呼ばれる存在にとっては枕事は欠かせない技能ではあるが、

楓は生粋の忍者として技を叩き込まれており、その辺りの技能は持つていないのである。

「でも、良いわよねえ。好きな人と一緒になるって決まってる。私も高畑先生と……………」

「あ……………まあ頑張ってくれや。」

妄想という名のあっちの世界へ行きかけてる明日菜にまたか、と呆れる翔太であった。

まあ、とは言え「まだ始まったよ……………」位のレベルではあるが。

ガイノイド・絡繰茶々丸が彼と出会ったのも1年の頃。

それは、大木の上に登って降りられなくなった猫を助けようとした事から始まる話。

スラスターを吹かし、上昇しようとする茶々丸を止めたのが翔太だ。体格、身長から小学生かと推測するが、着ている制服とクラスメイトの双子から類推して

恐らくは同学年であろう事と茶々丸は最終的に判断する。

「何故止められるのですか？」

「……………お前、そんな爆音上げて近づいてみる。猫がびびっちゃうだろうがよ。」

言われてみればその通りだと彼女は判断する。

次のメンテの時にはハカセにスラスターの音をどうにかして貰おうとメモリーに記憶しておく。

しかし、今は現状でどうにかするしかない。

「ま、ここはオレが行ってくるから黙ってみてなって。」

まるでちよつと散歩に行つてくると言わんばかりの調子で、ひよいひよいと木を登つて行く。

その身こなしはまるで忍者さながらである。

同じような身こなしをするクラスメイトがいた事を思い出す。

『彼女』と同様に忍者、またはそれに近い人物であると推測する。

そうこうしている内に、無事に猫を助け出して降りてきている翔太。

「ほらよ、お前に渡しておくぜ。」

「……………宜しいのですか？」

助けたのは自分ではなくて、彼なのだ。

ならば、その猫（首輪が無い事から野良猫だろうか？）の所有権は彼にあるはずだ。

「宜しいも何も、助けてどうこうするつもりだったんだろうがよ？」

「いえ、その……………」

実の所、茶々丸に助けた後どうするかと言う明確なビジョンがあったわけではない。

ただ、降りれなくて困つてるようだから助けよう。そう判断しただけの事。

渡されて困惑している様子の彼女（と言っても、そこまで表情に変化があるわけでは

ないのではあるが）を見て取った翔太は溜息を付いて頭を掻く。

「しゃーねえな、付いてきやがれ。」

「……………はあ。」

これだからにわか猫好きは困るんだ、オレも余り変わらんけど。  
などとぶつくさ言う翔太。

特に付き合う理由も無いが、猫を渡されてしまった以上付いてい  
ざるを得ない茶々丸。

「あの、猫が好きなのですか？」

「犬よりはな。つか、犬は嫌いなんだ。」

間が持たない、と言う訳ではないが彼に質問してみる茶々丸。

「どうして犬が嫌いなのです？」

「…………昔、ガキのころに嫌と言うほど野犬の群れに襲われてな。  
そんな時から犬を見ると臨戦態勢に入りそうになっちまうんだ。」

と言うか流石にあの時は死ぬかと思ったぜ、と半分愚痴を零す彼。  
嫌と言うほど野犬に襲われる、と言う状況について彼女は推測する  
がデータ不足の為不明。

「さ、ついたぜ。」

そう言うて彼が連れてきたのは教会の裏手。

彼が現れたことに気がついたのか、この夕方の時間に来る事を知っ  
ているのか、

野良猫たちがにゃーにゃーと姿を現す。

「ったくよ、オレもしようもない話引き継いじまったぜ。」

などと言いつつ、コンビニ袋（いづどこから出したのかは、茶々丸  
も分からなかった）から

猫の餌やら、皿やら牛乳やらを取り出す彼の顔は、それほど嫌そう

でもなかった。

「あの……………この猫達は？」

「オレもよくわかんねえよ。バイト先の引っ越ししまった先輩から是非にと頼まれてな。」

……………猫好きだ、なんて言わなきゃよかったぜ。」

そっついながら手際よく餌をやって行き、よってくる猫に構う彼。

「ほら、お前もぼさつとしてんじゃねーよ。手伝え手伝え。」

「その……………何をすれば宜しいのでしょうか？」

「見りゃわかんたろうが、それくらいはよ。」

生憎、人への給仕の仕方はデータにあるが猫の面倒の見方はデータには無い。

これもハカセにインストールしてもらおうとメモリーに記憶する茶々丸。

取りあえずは見様見真似で応対する事にする。

そうこうしている内に、野良猫達も満腹になって満足したのか去っていく。

その中には、先ほど助けた野良猫の姿もあった。

「ま、こんなもんだろ。」

「……………ずっとこのような事を？」

「オレも始めたのはつい最近だよ。さっきも言ったけどつい頼まれちまってな。」

全く、安請け合いなんてするもんじゃなかったぜ……………」

頭を掻きながら餌代だって馬鹿にならねーんだぞ、と呟く彼。

そんな彼に、茶々丸はおずおずと提案した。

「あの……もし宜しければ、これからお手伝いさせて貰って宜しいでしょうか？」

「そりゃオレとしても願ったり適ったりだが……何でだ？  
連れてきておいてなんだが、アンタに手伝う理由は無いはずだぜ？」

確かに彼の言う通りだ。茶々丸に手伝う理由は存在しない。  
しかし、プログラムではない「何か」がこの行為が尊い事であると判断したのだ。

「ま、いいさ。オレも毎日来れるか自信がないしな。

アンタさえ良ければ来たらいいさ。大体あの時間なら猫ども来てるみたいだしよ。」

「わかりました。では、餌を用意して来させていただきます。」

それが、彼との出会い。

彼女と彼がお互いの名前を知るのは、もう少し先の事になる。

麻帆良学園女子中等部2 - A・出席番号15番、桜咲刹那が彼と出会ったのも1年の頃。

彼女には使命があった。

関西呪術協会の長・近衛詠春の娘にして、幼なじみである近衛木乃香を極秘に護衛する事。

彼女にとって木乃香は大事な存在であり、彼女を護る為ならその命すら喜んで捧げるだろう。

とは言え、この麻帆良内においてはそうそう危機的状況は発生しない。

麻帆良全体を覆う結界とそれに慢心しない警備陣。この地は揺りかごのような物なのだ。

しかし、それでも彼女は油断しない。

出来うる限り、影から見守る形ではあるが彼女の護衛についているのだ。

そんな彼女が、彼と出会ったのは部活動の時。ただし、自身の部活では無い。

図書館探検部。麻帆良に存在する巨大建造物・図書館島を探検する部活動であり、護衛対象である近衛木乃香が在籍している部活動である。

図書館島内部は巨大なダンジョンと化しており、浅い層とは言えども危険は発生しうるため、出来うる限り自身が護衛に向かうようにしているのだ。

そこで木乃香と一緒にいたのが彼である。恐らくは同じ部員なのであろう。

正確には図書館組の3名・宮崎のどか、綾瀬夕映、早乙女ハルナ・も一緒であったが。

一瞬何故小学生が？とも思ったが、男子中等部の制服を見て同学年と判断する。

ぱつと見はいいとこの坊ちゃんに見えるが、漏れ聞こえる口調は柄が少々悪い。

ただ、どつちかと言えば悪ぶっているイメージの方が強い。悪ガキと言った所だろうか？

部活動の様子・つまり、図書館島内部の探索・を見る限り、彼の身体能力は高い。

クラスメイトである忍者（本人は否定するが）を彷彿とさせるくらいには。

登攀にせよバランス感覚にせよ、何をやらせても一般人の枠内では収まりそうに無い。

……… もっとも、この麻帆良では『一般人』の定義が少々変わってくるのだが。

何らかの目的でお嬢様に近づいたのか……… そう彼女が考えてしまうのかもしれない話。

そして、その日の探索も終わり図書館島から出てみれば既に夕方近く。

まだ日は落ちていないが女性だけで歩いて帰るのも危険だろう、と同行を申し出る彼。

木乃香達にしてみれば断わる理由もなく、結果として駅まで送る事になる。

当然の如く後ろから彼女も追いかける。気づかれないように。

話題は他愛も無い話題のようではあるが……… ふいに、彼が声を潜めた。

彼の反対側にいた宮崎のどかがびくつ、と肩を震わせる。

不審に思う彼女。一体彼は何の話をしているのか。

そうこうしている内に彼は立ち止まり、木乃香たち4人だけが先へ行く。

手を振って彼女達を見送っている彼。どのような顔をしているのかは分からない。

しかし、ちらつと見えた木乃香達の表情はどこか不安そうな顔でもあった。

木乃香お嬢様を追いかけたいが、彼の動きが分からない。もしや足止めかと思う彼女。

その考えは間違っではないなかった（最も、理由は彼女の想定とは違

う訳であるが)。

木乃香たちが立ち去ったのを確認してから、彼は妙な行動を取る。人差し指を空に翳す。まるで風向きを確認するかのように。

結果が思わしくなかったのか溜息を付いた後に、彼は振り向き言葉を発した。

「そろそろ出て来いよ、ストーカー野郎。」

気づかれたのか!?

確かに自身の隠行術はそれほどではない、だがそれを陰陽術で補助しているのだ。

並大抵の腕前では気配を察知する事も困難なはず。

クラスメイトには通用しそも無いのが2、3人いるわけだが……

…。

だが、気がつかれた以上は隠れていても意味は無い。

元よりこの身はお嬢様を護る為にある。問いただすにはいい機会だと判断し、姿を見せる。

彼は少し驚いたようであった。

「何だ、女かよ……………」

「……………貴様、何者だ?」

彼の男女差別を髭髯とさせる暴言は聞き流し、質問をぶつける。

言外に、答えねば斬り捨てると殺気を込めて。

同様に殺気を込めて、彼も睨みつける。

「そりゃあこっちの台詞だ。てめえ、図書館島からずっといやがったな?」

何か行動を起こす訳でもねーから、無視してたんだがこつもついて来られると気味が悪い。

どういう理由でどいつを付け回してやがったのか、正直に吐いて貰おうじゃねえか。」

「わざわざ貴様に語る必要も理由も無い。」

まさか図書館島の段階から気が付いていたとは……………と言う驚愕を押し殺す彼女。

「気が合つな。オレもてめえに語る気なんざねーよ。真剣ぶら下げてるなら尚更な。」

「っ!？」

今度こそ本気で彼女は驚愕する。今だ竹刀袋から出していないこの刀を見破るのか、と。

確かに、竹刀袋に入れる以外の偽装をしている訳ではない……………ないのだが。

「おいおい、まさか見破られないと思ってたのか？上手に誤魔化しているつもりだろうが、

竹刀と真剣じゃ重さが違いすぎるんだよ。そんな袋じゃ見る奴が見ればすぐわかるぜ?」

「どうやら……………力尽くでも聞きだす必要がありそうだな。」

竹刀袋から抜き出したのは長より授けられし名刀『夕風』。

勿論、「まだ」斬り捨ててしまう訳にも行かないので、鞘からは出さずそのまま構える。

不審者ゲージがMAXまで上昇した以上、少々手荒になるが止むを得まい。

「やっぱり気が合うじゃねえか……俺もそう思ってたところだ。  
ストーカーどころか、辻斬り一步手前のキ印に容赦は不要、ってな  
」

そう言つて、ポケットから取り出した手甲を装着する彼。

身のこなしといい、装備といいクラスメイトと同じ（繰り返すが本人は否定）忍者の類。

そう類推する彼女。

明らかにポケットからポケットに収まらないサイズの物が出て来た事には驚かない。

この業界、ある意味何でもありである。

「てめえに一つ言っておく。風向きが悪かったことを後悔しな。

オレの選択肢に手加減の文字はないぜ？」

「…………その言葉、後悔するな！」

まさに、一触即発・即戦闘の空気。

だが、殺気が混じりあうその空間に平然と割り込む1人の姿があった。

「二人とも、その辺にしておこうか？」

現れたのは高畑・T・タカミチ。

この麻帆良にて広域指導員として名を馳せ、『死の眼鏡』『笑う死神』と恐れられる存在。

そして、桜咲刹那のクラスの担任でもある。

「た、高畑先生！？」

「……………何だ『死の眼鏡』（デスメガネ）かよ。丁度いい、ここにストーカーがいるぜ。」

早めにしょっぱいちまつてくれねーか？」

驚く刹那。

そして翔太はさっきまでの臨戦態勢はどこへやら、渡りに船とばかりに高畑に訴え出る。

「わ、私はストーカーではっ！」

「人の後ろから部活中、いや部活前からか？ 気配殺してひたひた付いて来て

ストーカーじゃねえなら一体何だつてんだ？ スパイか？ 暗殺者か？ それとも忍者かよ！？」

「そっ、それは……………」

言葉に詰まる刹那。あくまでも護衛の件は内密にする必要がある。

ましてや一般人にそれを語るわけには……………。

「わりい、辻斬りだったな。」

「貴様っ……………！！」

「その辺にしておいてくれないかな？ 駒井君。」

流石に辻斬り扱いされれば刹那とて腹も立つ。

そんな険悪な雰囲気になりそうな二人を取り成そうとする。

「おい、ストーカー兼辻斬り予備軍の肩持つ気か？ 広域指導員の名が泣くぜ？」

後、その名字で呼ぶな。」

実際、状況だけで見れば立場の悪いのは刹那である。

彼とて偶然図書館部の4人と出会い、現在の状況を聞かなければここにはいなかったのだが。

勿論、刹那の事情を彼は心得ている。

しかし、それを裏の - この場合は魔法に関する - 世界も知らない一般人に教えるわけにも行かないであろう。

彼も担任をしているクラスの生徒と同じく（くだいですが本人は否定）忍者とは言え、だ。

「とにかく、この件に関しては僕が預からせてもらおうよ。状況の説明もして貰わないといけないだろうし、二人ともちょっと来てもらおうかな。」

とにかく事態の收拾を図る為に、二人とも来てもらおう事にした高畑。

「そりゃ構わんが、最低でもあの真剣は没収しろや広域指導員。」

「それを言うなら、あなたのその手甲もでしょう!？」

「こいつはただの手甲だよ。てめえの真剣よりは100万倍安全だね。」

「勿論、双方武装解除した上でだよ。二人とも預からせてもらおうから。」

仕方ないとばかりに差し出す刹那と翔太。

それじゃあ、行こうかと高畑は声をかけて3人は歩き出す。

……………後は取り立てて語ることはない。

二人が（それぞれ別室で）高畑に事情を説明しただけの事。

そして結局、刹那が近衛木乃香の護衛をやっている事実を話さざるを得なくなった事。

何しろ、翔太から見れば刹那が辻斬り未満のストーカーと言う事実  
は動きそうにもなく、

木乃香と同じ部活動で彼が活動している以上、同じ騒ぎが起こるのが目に見えているのである。

最も、表向きの事情（近衛木乃香の実家は名家であり、身柄を狙われる可能性がある）しか

教えておらず、あくまでも内密の話であると翔太にも言い含めたし、彼も理解はしたのだが……納得はしていない。

彼に言わせればこうである。

「護衛ねえ。アイツ、仮にオレが本当に暗殺者ならどうするつもりだったんだろうな？」

刀一本で陰から護衛とか……射刀術か縮地の使い手か、つつんだ。」

そう言われた事を知る事無く、彼女は護衛を続ける。

近衛木乃香を護る為に。

ちなみに、隠行術の修行の為にクラスメイトの忍者（本当にくだいですが本人は否定）に  
相談したのは超余談である。

## 第二巻：バイトと猫とストーカーでござるの巻（後書き）

> 明日菜パート

それほど話が発展しなかったとも言つ（おい。

> 許婚

1話の段階でお察しされた方もいるでしょうが……（え）。  
最初に言ってますように、当作品のヒロインは楓でございます。  
んにん。

> 一昨年

小学5年生時の話となりますね、翔太と楓の出会い。  
多分楓はこの頃の段階で身長でかかったはず。

> 鋼の自制心

よく考えればこいつらまだ中一。

ちと色ボケすぎたかなあ？

まあ、翔太君は紳士なんだということで一つ宜しくお願いします。

> ガイノイド

全員出席番号〳番つてやるのもなんだかなあ、と思ひまして。

せつかくロボだしいいよね、と。

次のせつちゃん「神鳴流剣士」で行けるけど明日菜がちょっと見  
当たらない。

まさか「バカレツド」って書く訳にもいかないし、書いてみたけど  
違和感バリバリでした。

> 教会の裏手の猫のたまり場

と言つわけで、脈々と引き継がれてる場所と言つ説をでっち上げて

みたへえ

よく考えるとこの教会、シスターシャークティとかいるんじゃないの？

それとも他に教会があるのか？

>このちゃんの護衛

真面目にやるなら部屋も一緒にして同じ部活動にいるべきだよな、とw

せつちゃんにもプライベートとかはあるんで強くはいえませんが……。

と言うか、護衛1人とか絶対無理だってw

>彼はいかにしてこのちゃんと知り合ったのか。

本の雪崩から助け出した、とか書こうと思いましたがそれだとせつちゃん涙目と言うw

むしろ護衛仕事しろと言われてもしょうがないレベル。

と言うわけで純粹に同じ部活の部員です。

>遭遇、せつちゃん

書いてて気が付いた。これ楓の時と同じじゃねーか（おい。

ちなみに武者修行中に流石に神鳴流とは遭遇しておりません。

>偽装竹刀袋

魔法とかで誤魔化せば、とも思いますが見る人が見るとやっぱバレバレじゃね？と。

>斬り捨てる

とは言え本気で叩き斬るつもりはございません、はい。

>貴様何者

「何の目的があつてお嬢様に近づいた!」とか言つとぼんこつせつちやん爆誕のお知らせw  
あのメンバー（本屋、パル、ゆえ吉、このちゃん）で「お嬢様」ってイメージがしっくり来るのは一人しかない罷。

> 高畑さん

楓繋がりで名前くらいは聞いていると思います。  
生徒の素行調査だのしていると、許婚の存在くらいは浮かび上がるでしょうし。

最も、その許婚相手が自分の生徒を上回るトンでも忍法使いであるまでは知らないと言つ事で。

> 後は

割とg d g dしてきたのでまとめました（おい

> 刀一本で

せったん、一応陰陽術も使えるんですが……知ってるわけも無く  
w

### 第三卷…とあるニンジャの1日でじゅるの巻（前書き）

まさかのバレンタインネタ。一日遅れw

### 第三巻：とあるニンジャの1日でじわるの巻

駒井翔太の朝は早い。

新聞配達ของバイトをしているので当然と言えば当然なのであるが。目覚ましを鳴る前に止めて顔を洗い、ルームメイトを起こさないように着替えて

前の晩に用意しておいた飯を食う。そしてそつと出て行くまで20分も掛からない。

バイト先まではランニングで静かな街を駆けて行く。

特に重りをつけているとかはしていない。

常在戦場を心得とする彼にとって重しは邪魔にしかないからだ。

そんな彼のバイト先での評価は極めていい、と言っても良い。

無遅刻無欠席、大きなクレームが出たことも無く、口調に反して礼儀も知っている。

仕事場での人間関係も良好な部類と言ってもよい。

「ほら、翔太。これあげるわ。」

仕事が終わった後、神楽坂明日菜が何かを投げて寄越すのを受け取る翔太。

いかにも市販品でござい、と言わんばかりのラッピングがされた長方体のへらべつたい物体だ。

「……………なんだこりゃ？」

「なんだこりゃ、って今日が何の日か知らないの？」

そう言われて思い出そうとする翔太。

しばらくして、合点が言ったのかポンつと手を叩く。

「俺の誕生日にはまだ早いぜ？」

「違うわよっ！今日はバレンタインでしょ！？」

「……………おお。」

すっかり忘れてた、と呟いてバリバリとラッピングを破りだす。

「言っておくけど……………」

「分かってるよ、義理だる義理。本命はちゃんと渡すのか？手作りを？」

「な、何で手作りって……………」

名探偵にズバリ言い当てられたかのごとくうろたえる神楽坂。

おっ、チヨコじゃねーか。と当たり前の事を言いながらムシヤムシヤと食べたす翔太。

「いやお前、そんだけ指に絆創膏張り巡らせてたら嫌でも気がつくだろうぜ？」

頼むから隠し味に私の血液を入れたのよ、とかそう言うのはやめとけよ？」

「やんないわよっ！……………まあ、そう言うのもあるって話は聞いたけど……………」

後半の神楽坂の呟きは華麗にスルー。本当にやってそうで怖い。

「そっぴや、バレンタインが何でバレンタインって言うか知ってるか？」

そんな翔太の問いに首を振る神楽坂。

さすがバカレッドの異名を（1-A限定で）持つ女である。

「そもそもは1945年に日本が負けたところから始まってな。当時の日本には物が無くてよ、沢山の子供達が毎日すきつ腹だったわけだ。」

でだ、進駐軍のアメリカ軍人が美味そうにチョコレートを食べてるのを見てな、

拙い英語で子供達が『ぎぶみーちよこれー』とチョコレートをねだってたんだよ。

そんな光景を見た当時GHQで少佐やってたジョン・バレンタインって奴が私財を投じて

チョコレートを飢えた子供達に分け与えてた、って美談があつてな。そいつにあやかってチョコレート会社が仕掛けた商品戦略だよ。」

「途中まで凄い美談に聞こえたのに、いきなり身もふたも無くなつたわね。」

ジト目で神楽坂が翔太を見る。無論、堪えるわけも無く。

「しょうがねーだろ、チョコレート会社だって売れなきゃ社員食わせられねーんだ。」

「それはそうだけど……何にせよ、そういう話があつたんだ。って、そろそろ寮に戻らないと寝る時間確保できないじゃないっ！それじゃあねー！」

そう言って、駆け出していく神楽坂。

そんな彼女を見送りながら翔太は思う。

「あいつ、マジで信じたのかよ？」と。

それはさておいて、自分も二度寝と洒落込む為に帰宅する事にする。彼が生活しているのは麻帆良男子中等部男子寮である。

大きく女子寮と変わる所と言えば大浴場が無い、と言うことくらいであろうか。

そのせいで全体的に女子寮に比べて小さくなってしまっているのではあるが。

出た時と同じ要領で静かに入室し、そのままベッドに入って二度寝に入る。

目が覚めるのは朝食の匂いである。

「あ、起きた？ 丁度もうすぐご飯できるから着替えた方がいいよ？」

それを察して掛かるのは柔らかな声。

正確に言えば、女性みたいな声と言ったべきなのか。

唸り声のような返事を返して着替える翔太。

食卓には既に朝食が湯気を立てて並んでおり。

翔太が椅子に座るとタイミングよくお茶が置かれる。

「おはよ、しょーちゃん。」

「おう、おはようさん。」

しかしなあ、と茶を啜りながら翔太は思う。

「……………どうしたの？ 難しい顔して？」

「いやさ、改めて人生の不条理に頭を悩ませてな。」

ふーん、と小首を傾げる目の前の彼こそルームメイトの巫女巴である。所属は演劇部。

腰まである流れるような黒髪に、女だと言われても納得しそうな顔。

体つきも相まって、男装した女性だと思われる事も多々あるのである。

「（ぜってーこれで男、とか嘘だろ本気で……………」

何でも女系家族で周りは皆女ばかり。小さい時から女の子の服を着てたとか。

何しろ初めの頃は何で女性が男子校にいるんだ！と言う話になったくらいである。

ついでに言えば翔太と一緒に休日出かけた所を偶然楓に見られ修羅場になり掛けた事がある。

「いや、まさか男性とは思わなかったでござる。拙者も修行が足りんでござるなあ。」

と後に楓は述懐する。

「私にはしょーちゃんが何を悩んでるかは分からないけど、話くらいなら聞けるよ?」

「いや、いい。今更悩んでもしょうがないことだからな。」

と言って飯を食べ始める。相変わらず美味い。

自分も自炊くらいはできるが、ここまで美味しい料理となると流石に無理がある。

どちらかと言えば「食べられれば問題ない」と言っただけレベルの料理なのだから。

いや、一品だけ得意料理はあるのだが……………。

「そう言えば今日ってバレンタインだよね?」

「……………誰かにやるのかよ？」

思わずそう聞いてしまう翔太。苦笑する巴。

「残念だけど、私にはあげる相手がいないんだよね。受け取ってくれる？」

「全力で拒否するぜ。と言うか義理でもクラスの奴にばら撒いたら狂喜乱舞しそうだぞ？」

「私には物凄い葛藤をしながらも泣きながら受け取る姿しか思い浮かばないかな？」

「それ、悔し涙とか言わねーか？」

そんなお馬鹿な話を話しつつも食事は進み、一気にシーンは学校へと移る。

「うわぁ、見て見てしょーちゃん。下駄箱確認してる人いるよ？」

「……………入ってたらまずいだろう、色々だよ。」

と言うか、そう言うのは部活動の時なり校門の外で渡すだろうにな。

「

そんな事を言いながら自分のクラスの教室に入り、自分の席に座る

翔太。

一番前の窓際であり、隣の席には巴が座る。

「よう、お二人さんお早うさん。今日も仲睦まじいねえ？」

そう言いながら後ろの席で朝っぱらからチョコレートを食べる巨漢…

……………もといデブが一人。

机にはチョコレートの山がどさつ、と置かれている。

「朝飯今食ってんのかよ。後、仲睦まじいとか言っな。」

「ていうか、朝ごはんにお菓子は健康に悪いと思うよ?」

「朝飯じゃなくて間食だよ。」

そう言いながらも食べるのを止めないのはクラスメイトで翔太達と仲の良い一人である

富戸山太司である。所属は相撲部。

「おい、まさかとは思うがそれ貰ったのかよ?」

「はははっ！当たり前じゃないか翔っちよ。何もしなけりやただのデブだが、

相撲取りならもてるんだぜ?」

「……………よく言うよ、バレンタインセールに便乗して買い込んだんじゃないか。」

ぼそぼそとした声で彼の隣の席から声がする。

背の高いやせ細った少年だ。一見すれば虐待で飯でも抜かれてるのかと勘違いされかねない。

「ちよっ、おまつ！ 何でそんな事知ってるんだ細っちっ!!」

「……………ボクの耳に入らない話はないよ? ってね。」

「って言うか、いたんだね……………長井くん。」

「いや、気がついてやれや。」

「……………ボクとしては、気がつける翔太君が凄いと思うよ。」

相変わらずぼそぼそとした、それでいて聞き取りやすい声で話すのは長井細緒。

所属は新聞部。

先の二人と同様に翔太と仲が良く、この4人で一グループを形成し

てると言っても良い。

「……………しかしバレンタインなんて所詮はチョコレート会社の陰謀なんだがね。」

「ははっ、細っちよ。そいつは事実かもしれないがモテナイ男の癖みにしか聞こえんぜ？」

「って、太司くんだってそれ自腹でしょ？」

「おうよ、食ったもんは俺の腹の中だからな。」

「誰が上手い事言えって言ったよ、この太っちよ。」

腹を叩いて笑う太司に突っ込む翔太。

「つかよ、巴っちも翔っちもチョコの宛は確保してるんだろっ？」

「当たり前だろうが。つか、バイト先でとっくに貰ってきたつてばよ。もう食ったがな。」

何故か無駄に胸を張る翔太。

「けっ、本命ありの癖に義理まで貰うとはふてえ野郎だ。」

「太いのはてめえだろうがよ、この太っちよ。」

「……………まあ、それだけ翔太君の人脈が凄いつてことだよ。」

「あれは人脈って言うのか？」

首を傾げる翔太。

やたら楓のクラスと関係が深い、と言うだけの話なのではあるが。

「で、巴っちはどうなんだよ？モテるんだろ？」

「全然私なんてモテないよ。演劇部じゃずっと女役だよ？」

むしろ男子に期待されてるくらいで……………一応義理は買い込んだけどね。」

「買い込んでんじゃねーよっ！！ てかよ、そんなに嫌ならその女らしいのをどうにかしろよ？」

思わず突っ込みを入れてしまう翔太。

それに、何故か煤けた感じで巴が応対する。

「小さい頃に女、女って近所の子に苛められて男らしくしてやる、って丸坊主にした事がある。」

「……………どうなった？」

「『尼さん』って渾名がついたよ。」

沈黙する3人。

それに構わず巴の独白は続く。

「だから私は思ったのさ。女って言われるくらいなら女らしくなつてやるって。」

目指せ、有栖川 ってね！！」

何故かガッツポーズを取る巴。

「…………… 巴君は女になりたくないのかなりたいのかどっちなんだ？ どう思う翔太君？」

「知らねえよ、んな事。つか、俺に振るんじゃねえよ。と言うか有栖 桜ってどこの誰だよ？」

「あれだ…………… バ コドファイタ のヒロインでな……………」  
「太っちょ詳しいな、おい。」

そんな感じの g d g d 具合が朝の H R まで続くのである。  
そして一気に時間は飛んで放課後となる。

「うーっす。チョコ貰いにきたぜー。」

「義理でよかつたらあげるえー。」

「と言うか、貰える事は大前提なんですか。」

図書館探検部部室。

ちょうど1 - A図書館組がたむろっていた所にやってきたのは勿論翔太である。

「義理でもチョコはチョコだ。俺は誰の挑戦でも受け付ける。」

「受け付ける、って楓ちゃん怒っちゃうんじゃないの?」

「いや、あいつはそんな狭量じゃねーよ……………いや、一度だけぶち杀れた事があつたな。」

微妙なラブ臭がつ！などと言い出す早乙女をスルーしつつ、思い出して背筋を振るわせる翔太。

何だかんだで図書館探検部の中でもトップクラスの身体能力者が思い出すだけで恐ろしい、と

思う思い出に彼女達は興味を持ったらしい。

「一体何やつたん?」

「いや、バレンタインデーの返しにマシユマロをな……………」

「それは怒られてもしょうがないのでは?」

「何で?」

「…………『ごめんなさい』って意味だそうですー。」

一人分かってない早乙女に、宮崎がフォローを入れつつ。

「まあ、全力で土下座かまして許してもらったんだが……………」

正確には、土下座＋甘味一ヶ月奢りで手を打ったのであるが。

「そう言えば翔太君、アスナに変なこと教えんかった？」

「あー、朝にバレンタインの元ネタについて一席ぶったくらいで、特に変なことは。」

唐突な近衛の質問に答える翔太。

それに、早乙女が口を挟む。

「いやアレめっちゃ変なことだから。アスナ赤っ恥状態だったわよ。」

「翔太さんは、明日の朝覚悟した方がいいかも知れませんか。」

綾瀬の言葉に頷く宮崎。

とは言え、翔太に反省の色はない。

「いや……まさか信じた上に人に喋るとは思わなかった。」

「あかんえー、アスナそういうの信じ易いんやからー。」

やんわりと近衛が注意するが、それほど怒ってる訳でもない。  
直に話題を転換させる。

「せやせや、チョコレートやけどな。皆に渡しよったら凄い数になるやん？」

「まあ、合同だしなあ。」

「なので、こう言うのを用意させてもらいました。」

と、綾瀬が出してきたのは大きな段ボール箱に収まったチョコレート  
の山！

「…………おい、まさかこれが。」

「はい。男性陣はこの箱から好きなチョコレートを食べてください。勿論、私達も小腹が空いたら取る事になるかも知れませんが気にしないで下さい。」

「いやー、問屋まで行って買ってきたからねー。これ。」

「…………義理とかってレベルじゃねーぞ、これ。」

啞然とする翔太。

何しろ、段ボール箱にぎっしり入ったチョコレートは全部チロルチョコだったのだから。

部活動も無事終わり、1人帰路につく翔太。

しっかし、あいつ相変わらずストーキングしてやがるなあ、などと呟きながら。

「やはり一朝一夕では翔太殿に敵わんでござるなあ。」

「たりめーだ、こっちはベテランなんだよ。って教えてるのはお前かこのバ楓。」

いつの間にか横を歩いている楓を横目で確認。

「いやいや、まさか刹那殿の方から『隠行術について教えて欲しい』等と

声をかけられるとは拙者としても想定外だったでござる。」

「で、受けたってか。」

「週一で手合わせ込みの実戦講座でござるよ。拙者も勉強になるでござる。」

「どうでござるか？翔太殿も一つ……………」

「遠慮しておくわ。どーもあいつは好きになれん。」

「まあ、話を聞いた分ではお互い第一印象最悪と言った感じでござろうからなあ。」

桜咲は桜咲で、辻斬り扱いされた事を根に持っているらしい。

「とは言えモノホンの刀持っててそこらに潜まれてみる？どうみても辻斬りだろうに。」

「まあまあ。刹那殿にも都合があるんでござろう。それこそ余人には語れぬような。」

そして、会話が途切れる。

黙って歩く二人。

歩幅こそ違え、足並みは揃い。

「今日はバレンタインデーでござるな。」

「GHQのジョン・バレンタイン少佐がな……………」

「その話は数年前に聞かされたでござる。ついでに言えばアスナ殿も騙したでござろう?」

「あー、近衛達の方から話は聞いている。明日は俺風邪引いて休む事にするわ。」

「では、このチョコはいらんでござるな?」

そう言つて楓が取り出したのは本命でござい、と言わんばかりの包装がされた大きな目の箱。

「物凄いい欲しい、と言つか凄いくれるとオレが感謝する。」

「ふむ、ではこういう時に言言葉があったでござろう?」

「勘弁してくれよ……………」

「何を言つでござるか、人前で言わせないだけ拙者の慈悲があると思つでござる。」

はあ、と溜息をつく翔太。

過去の身から出た錆とは言え、正直やりたくないのだ。  
とは言えチヨコは欲しい。好きな女からの本命だし。  
だから、彼は覚悟を決めて声を出す。

「『ぎぶみーちよこれーと!』」と。

### 第三巻：とあるニンジャの1日でじわるの巻（後書き）

> 手作り

いや、チヨコで指を絆創膏まみれにするのかどうかは知りませんがw

> 血液入り

「事務所に来るチヨコなんかは全部処分するとか言う話を。と言つか、この手のファンからの食べ物全部処分かしら。」

> 小さい時から

こういう事やると精神歪むらしいっすな。

自分の性別がわからなくなるとか何とかかんとか

> 尼

某芸能人？のエピソードより拝借（え）。

> みんなのヒロイン有栖川 さん

一応伏字でw

同じ先生のエロ漫画で出てきたときは思わず吹いたw

と言つか、ぐぐったら酷い事になってたw

同人で何書いてんだよ先生よーw w

> 1 - A 図書館組

本屋、パル、ゆえ吉、このちゃんですね。書くまでもないのではありませんが。

ついでに言つと、本屋は基本喋らないだけです（おい）。

> マシユマロ

「ごめんなさい」の意味だと聞いたんですが、ソースが見つからな

か  
っ  
た。  
。

第四卷・とあるニンジャの1日・その2でござる、の巻（前書き）

バレンタインデーをする以上は、ね。

後、話の基本的な流れは3話と同じです（おい。  
それと短くてごめんなさい。

#### 第四巻：とあるニンジャの1日・その2でいやる、の巻

3月14日、それはホワイトデー。

「ほら、やるよ。」

いきなりバイト仲間の翔太から小さな箱を放り投げられた神楽坂明日菜は慌てて受け取った。

いかにも市販品でござい、と言った感じの包装紙に包まれたそれを見て首を傾げる。

「えっと、これ何？」

「ホワイトデーの返しだよ。いらねーなら返せ。」

ああ、そう言えば今日はホワイトデーなんだっけと思い出す神楽坂。

「いるに決まってるじゃない。中見ていい？」

「大したもんじゃねーぞ？」

そう言う翔太の言葉を聞き終わるか終わらないかの内にバリバリと包装紙を開ける。

箱の中に入っていたのはキャンディーの詰め合わせだった。

「意外と普通な物が入ってたわね……………」

「お前が俺をどう思ってるか良くわかったよ。」

やや無然とする翔太。

あはー、と笑って誤魔化す神楽坂。

「そもそも、ホワイトデーってのはな……………」  
「今度は騙されないわよ!」

警戒態勢をとる神楽坂。

先月クラスでバレンタインデーの語源について話したら「それは嘘だ」と言われたので

当然と言えば当然である。ちなみにそれを言ったのは楓だったりする。

「いや、翔太殿が昔話した内容そのままでござったからな。無論、最初に拙者が聞いた時も騙されてしまったのでござるが。」

とは後に楓が語った台詞でもある。

「いやいや今度は間違いなく本当だって。そもそもホワイトデーってのはバレンタインデーの

歴史を説明する所から始めなきゃならないんだが……………そっちは聞いたか?」

「確か、ヴァレンタインとか言う人が死んだとかそんな話は聞いたけど。」

確か、バカリリーダーこと綾瀬夕映がそんな事を語っていた事を思い出す神楽坂。

とは言え先月の話なのでほとんど頭から吹き飛んでるのは流石バカレッドである。

「改めてそこから話をするとな、そもそもバレンタインデーってのは兵士の自由結婚禁止政策に背いて結婚しようとした男女を救うためにウァレンティヌス司祭が

死んでしまった日だな。

そこから恋人達の日、って事になっちまったんだよ。  
で、その結婚しようとした男女・ホワイト夫妻って言っんだが、  
改めて永遠の愛を確認した

のがその翌月の3月14日って事で、夫妻の名前にあやかっ  
てホワイトデーって付いたんだよ。

そこから2月14日に『貴方の事を愛しています』と女の方から贈  
り物を贈ってだ、

3月14日に男の方が『僕も君の事を愛してるよ』って贈り物を贈  
って返礼とする、

と言う行事にしたんだよ。チョコレート会社以外の製菓会社がな。」

「だから、何で最後にそんなオチをつけるのよ……………」

額を押さえる神楽坂。

「しょうがねーだろ、バレンタインの日だからってチョコレート売  
ってる会社だけ

丸儲けとか他の製菓会社が黙っていられなかったんだからよ。」

「そりゃそうだけど……………何にせよ、そんな話があつたなんて知ら  
なかったわ。

って、そろそろ寮に戻らないと寝る時間確保できないじゃないっ！

それじゃあねー！」

そう言っ  
て、駆け出していく神楽坂。

そんな彼女を見送りながら翔太は思う。

「あいつ、また信じたのかよ!?」と。

所変わって、麻帆良学園男子中等部。

その下駄箱で翔太は啞然としていた。

「……………おい、ホワイトデーとバレンタインデーをごっちゃにしてる奴が居ないか？」

「あはははは。」

ルームメイトであり、クラスメイトである巫女巴の靴箱には物が溢れかえっていた。

予め用意していた紙袋に入っていた物・どう見ても菓子類だと思う・を放り込んでいく巴。

「ほら、返しだよ返し。バレンタインの時に演劇部の男子に配ったっていったじゃない？」

「だったら部活動の時に返せつてよ……………」

翔太は頭を抱えなくなった。

そもそも、バレンタインデーで貰ったからと言って巴は男なのだよ、その前に男からバレンタインチョコを貰って返しをすると言っうのはどうなんだ？

そんな感じで悩みながらも、自分のクラスの教室に入る。

「よう、どうしたよ翔っち？頭抱えちまって金色の輪っかでも嵌められたか？」

「俺はこのサルだってんだ。巴の持つてるもん見たら分かるだろうよ。」

クッキーの缶を抱えた状態の富戸山太司はそこで巴の持つてる紙袋に気が付いた。

「おはよ、太司くん。朝からおやつは感心しないよ？」

「よう巴っち。世の中朝食はおやつだって言ってるやつもいるんだ。気にすんな。」

てか、その紙袋の中身はアレか？返しと言っやつか？」

正確には返された物だけどねー、と言いながら自分の席に座る巴。  
翔太も座る。

「…………バレンタインかい？」

「そ、それのお返しって奴だよ。って長井クンいたんだ。」

「いや、だから気が付いてやれよ最初から。」

相変わらず翔太だけが気が付いていた長井細緒に返事を返しなが、袋の中に詰めた物を改める巴。

「クッキーとかチョコレートなら食べきれ無いだろうから俺にくれ。」

「いやその前にその缶はどうしたんだよ太っちょ。」

「…………ホワイトデーのセールで買い込んだよ。」

「だからなんで知ってんだよ細っちょっ！！」

そんな太いのとちっこいのと細いのの喋りをバックに黙々と箱を取り出して中を確認する巴。

「…………ねえ、しょーちゃんどうしよう？」

「どうしたよ？いきなり心細い声だすんじゃないよ？」

「これ、どうしたらいいと思う……………？」

そう言って、一つの箱から取り出したのは…………

「おい、太っちょお前に任せた。」

「細っちお前に任せるぜ。」

「……………ボクに振られても困る。」

女性用の下着だったりする。

「つける、って事なのかな……………」

「全力で拒否しろと言うか、いいからとっとと隠せそれっ!!」

結局、下着はそのまま処分と言う事になったとき。

「と言うか、しょーちゃんが彼女にこれをプレゼントしちゃえば…

……………」

「やるかっ!!」

再び場所は変わって図書館探検部部室。

「ういーっす。ホワイトデーの返しに来たぜー。」

そう言っただけに入った翔太を迎えたのは1 - Aの面子であった。

……………彼にとっては予想外の人間もいた訳だが。

「よくも騙してくれたわね……………」

そう、静かに怒りに燃える神楽坂明日菜である。

そんな彼女から離れた位置に1 - A図書館探検部のの面子はいるわけであり。

「あうう、暴力はダメですよー。」

「アスナー、ほどほどにしときゃー?」

「と言うより、一度懲りてるはずなのにどうしてまた騙したりした  
ですか。」

「でも、アレで騙されるアスナもどうかと思うけどね。」

そんな感じで好き勝手言っている状態であった。

「って、何で神楽坂がここにいるんだよっ!？」

「あんな、アスナがまた自爆したんよ。」

「自爆って言うなー!!」

そう、クラスでの雑談でまたやらかしたのである。

当然の事ながら、博学知識豊富なバカリリーダーの綾瀬、そして同じ  
手に昔引っかかっている

バカブルー・長瀬にとってはそれは明らかに嘘っぱちであり。

「確かにバレンタインデーの時とは違って真実の中に嘘を交えた訳  
ですから、

100%嘘と言うわけでは無いんですが……」

そう言つて『黄金の蜂蜜ジュース』と書かれた紙パックのジュース  
を飲む綾瀬。

「て言うかよ、明らかにホワイト夫妻つてのが怪しさ大爆発だつて  
気が付けよっ!!」

「そんなの気が付く訳ないじゃないっ!!」

「いやー、流石に皆気が付いてたけど……」

口を挟みかけて神楽坂に睨まれて口を塞ぐ早乙女。  
流石に飛び火は勘弁したいらしい。

「ともかく謝った方がええでー。このままやと狼少年扱いにされて  
まうよー?」

「そうですー。あ、謝った方がいいと思いますー。」

そんな近衛と宮崎の説得を受け入れたのか、急に身じまいを正す翔  
太。

「な、何よ?」

そんな彼にたじろぐ神楽坂。

「……………すまん、お前がそこまで本気にしてるだなんて思わなかつ  
た。

ただどな、オレにとってはあの朝の出来事は遊びでしかなかったん

……………」

「紛らわしい言い方してるんじゃないわよっ!!」

言い終わる前に、ぶん殴られた翔太だったりする。

「本気で反省してるんでしょうか、彼は?」

「照れ隠しなんちゃう?素直に謝れへんのやって。」

呆れた目で見える綾瀬と好意的な方向で捉えてる近衛であった。

「おー、痛え。」

殴られた頬をさすりながら立ち上がる翔太。

「だ、大丈夫?」

殴ってしまった神楽坂も少しやりすぎたと思ってるらしい。  
さっきまでの怒りも収まったようではある。

「ま、これでお相子って事で手打ちにしようぜ？ちと俺も悪ふざけが過ぎちまったしな。」

「もう。これつきりなんだからね？」

元々神楽坂も根に持つタイプと言うわけではなく。  
何だかんだで和解する二人。

「さて、ちとゴタゴタしまったがホワイトデーの返し持ってきたぜ。」

「誰のせいでゴタゴタしたと思ってるんですか。」

「そいつは言っちゃいけないお約束だぜ？」

綾瀬のツツコミを華麗に流しながら、部室の外に置いてあったダンボールを部屋に入れる。

「何よこれ？」

「いや、バレンタインの時によ。『皆に渡してたら凄い数になる』って事でダンボール単位で

チョコレートを男子勢に貰う形になったんだよ。当然、返しも全員に返してたら凄い数に

なるからな。こっちもキャンディーを箱単位で用意させてもらったぜ。」

神楽坂の疑問に答えながら、ダンボールを空ける翔太。  
その中にはぎっしりと様々な種類の飴が詰まっていた。

「あれ？でもホワイトデーは3倍返しじゃないのかなー？」  
「……………そういうと思ってたぜ。」

にしし、と笑う早乙女にニヤリ、と笑みを返す翔太。  
そのまま再び部室の外に出るともう二箱ダンボールを持ってきたのである。

流石にその場にいた全員が啞然とする。

「えっと、それって……………」

「だから『3倍返し』だよ。これで満足だろ？」

「物凄い量になってますー。」

「3倍の意味が違います……………」

「食べきれんやろか、これ？」

「その前に、溶ける心配した方がいいんじゃない？これ。」

そう、ダンボールの中身は尽く飴だったのだから。

「相当このダンボールは重いんですが、2つもよく運べましたね？」

「こんなもんだろ？」

「よいしょっと……………そうねえ、こんなもんじゃない？」

「お二人の力を基準に物事を考えられても困ります。」

部活動も無事終わり、1人帰路につく翔太。

しかし、大分隠行術もモノになってきたよな、などと呟きながら。

「やはり教える人間の腕前が良いからでござろうなあ。」

「抜かしてろ、って言うか洒落にならんレベルにまで持っていかれ  
ても困るぞオレが。」

いつの間にか横を歩いている楓を横目で確認する。

「いやいや、刹那殿は中々筋がいいでござる。拙者としても教えがいがあるでござるよ。」

「分かってると思うがな……………」

「無論、全てを教えるつもりはござらんよ。そこら辺は弁えてるでござる。」

「で、アイツと戦ってみてどうよ？」

「軽い手合わせ程度でござるが、相当の使い手である事は間違いないでござる。」

翔太殿も油断していると足元を掬われるでござるよ？」

「……………精々気をつけるさ。」

そして、会話が途切れる。

黙って歩く二人。

歩幅こそ違い、足並みは揃い。

「今日はホワイトデーでござるよ？」

「そもそも、ホワイトデーと言うのはな……………」

「その話も数年前に聞かされたでござる。ついでに言えばまたアスナ殿も騙したでござるう？」

「少し前にぶん殴られてきた。」

「全く、少しは自重するでござるよ。」

「……………気をつけるさ。」

そして、再び途切れる会話。

足音だけが道に響く。

「で、ホワイトデーだけだよ……………」

「拙者からリクエストをするなら、翔太殿の」

「ストップ。年頃の女が何喋ろうとしてやがるこのバ楓。」  
「ホワイトデーにちなんだ物品を所望しようとしてるだけでござるよ」

にんにん、と誤魔化そうとする楓。  
溜息を付く翔太。

「あのなら、一応俺達まだ中学生な？」  
「しかし既に拙者と翔太は婚約者でござるよ？何も問題はないでござるよ。」

「親御さんからも『くれぐれもよろしく頼む』って言われてるんだよオレはっ！」

「父母からは『孫の顔はまだか』と催促が矢継ぎ早でござる。」

「…………マジで？」  
「嘘でござる。」

ぐっ、と拳を握る翔太。だがその拳が唸りを上げる事はなかった。そつと密着するように楓が身を寄せてきたからだ。

「ならせめて、一緒に寝て欲しいでござるよ。」

それくらいならば構わないでござろう？」

「…………しゃーねえな。次の山修行の日でいいか？」

「無論。それでは拙者楽しみにしているでござるよ。」

では御免、と姿を消す楓。

「早まったかな…………オレ。」と呟いて翔太も帰路につくのであった。

後日。

山の修行場のドラム缶風呂にて。

「……………早まった。」

「いや、本当に我慢できなかったんでござるなあ。」

「るせえよ。始めからこいつが目的だったなっ!!」

「嫌だったでござるか……………」

「……………なわきゃねーよ。こう言うのはもうちよつと場所とか状況をだな。」

「と、言う割にはちゃんと準備して来てる辺り予感はあるんでござろう?」

「……………うるせえ、オレはもう上がる! って抱え込むな抱きしめるんじゃないっ!

胸が、胸が当たってるってよ!？」

「心配無用、当たてるでござる。」

「ちつとも無用じゃねーよっ!!」

終われ。

第四卷…とあるニンジャの1日・その2でござる、の巻（後書き）

ついにやっちまった気がする昨今いかがお過ごしでしょうか（え。  
小学生だつてやってる世の中だし別にいいよね！！

ちゃんと対策は取ってるから大丈夫だよきつと！！（そうか？）  
まあ、非難多いようなら削除する次第。

第五卷：裏との遭遇と不本意な結果でござる、の巻（前書き）

年代ジャンプ！

と言っても2年に上がったただけですが。

## 第五巻：裏との遭遇と不本意な結果でござる、の巻

4月15日。

麻帆良学園都市のメンテナンスの為、学園自体が停電し闇に閉ざされる日。

それは、この麻帆良を守る魔法先生・魔法生徒達にとって大変忙しくなる日でもあった。

関東魔法協会の総本山とも言えるこの場所を様々な理由・魔法使いへの恨みを持つ者、

図書館島の貴重な蔵書を奪おうとする者、重要な人物を攫おうとする者・にて狙ってくる輩を

撃退すると言う重要な仕事があるのだ。

無論、敵対勢力からこの麻帆良を守ると言う事はこの日だけの物ではない。

しかし、恒常的に展開されている結界が停電によりダウンしている今こそがチャンス、

と攻め入る曲者の数は加速度的に増加するのである。

その結果、防衛側は毎回過労寸前まで働かされる事になる。

一つの大きな街に、僅か4時間だけとは言え蟻の子一匹入れさせないという

防衛網を敷こうと言うのだ。

結界が当てにならない以上、人を頼るしかない。

そんな戦域の一角で鬼の群れと戦う者が1人。

後方に控える敵方の陰陽師と思しき人影を視線に捉え、襲い掛かる鬼を斬り伏せあるいは

魔法を撃ち放ち送還する。

風に舞い散る・川に流れる木の葉のような動きで鬼達の一撃をかわしながら。

その両手に持つのは扇。武器であり魔法発動体である一家に伝わる一品。

その姿は巫女服と呼ばれる衣装であり、これもまた一家に伝わる一品である。

腰まである長い黒髪を棚引かせながら、『巫女』は舞う。

『巫女』にとつては「神楽舞」と呼ばれる舞こそが戦いであり、詠唱でもある。

ある意味西と東、呪術と魔法の融合体と言っても過言ではない。

しかし、そんな『巫女』も限界が近づきつつあった。

この戦い方の欠点……その戦闘方法の都合上、長期戦には向かないのだ。

正確に言えば、体力の消費が半端無いのである。

防衛網の穴を突く形で侵入しようとしてきたこの陰陽師達を迎撃する為に手の空いていた

『巫女』が動いたのであるが……

「（こっちの増援、まだなのっ!?!）」

本来ならば2人1組、3人1組を原則として動くのが麻帆良防衛部隊である。

相方の魔法生徒は合流前の段階で負傷により一時離脱、やむなく一人で来たのだ。

一人だからと言って、侵入者をそのままにする訳にも行かない訳で。そして、実際に戦ってみれば、式神と召喚した鬼の混合による数で

押す一手。

魔力にも限界がある以上、どこかで力尽きるだろうがその前にこちらが力尽きそうだ。

そう考えた瞬間、鬼の金棒の一撃が『巫女』を吹き飛ばす。

魔法障壁と服に仕込んだ呪符、それに服自体に込められた加護によりそれほど致命的な

一撃を貰った訳ではないが、今の一撃は自身のリズムを狂わせるのには十分であった。

「神楽舞」の行使は舞を以って行われる以上、どれだけ舞に没入できるかも重要になる。

言ってしまうえば集中力と流れ・リズムである。

それが乱れてしまった以上「神楽舞」は不完全なものとなり、再び完成へ持っていくには

体力が持たない。それ以前に時間が許しはしないだろう。

そう、まさに目の前に再び一撃を加えんと金棒を振り下ろす鬼の姿があつたのだから。

もはやこれまでかと覚悟を決めたその瞬間。

その鬼の眉間に手裏剣が突き立った。

「え？」と思う間もなく、煙玉が投げ込まれ辺りは煙に包まれる。一体何が起こったのかと慌てふためく陰陽師と、動揺するも警戒する鬼達。

「やれやれ、人様眠らせてどっか行ってると思ったら何やってんだ？しかもそんな格好で。」

「えっ？ な、何でっ!？」

いつの間にか隣に立っているのは『巫女』 - 魔法生徒である巫女巴 - のクラスメイトであり

ルームメイトである駒井翔太であった。

「いやそりゃ巴よ？流石に停電の度に眠り薬盛られたら不審に思うつてばよ。」

そう、停電時は外出禁止の為、ルームメイトを誤魔化す為には眠らせるしかなかったのだ。

そのために夕食にこっそり眠り薬を混ぜておいたのだが……。

「ひよつとして、バレてた？」

「んにゃ、一回目は分からなかったけどな。流石にあの眠気の来かたはないな、と思つてな。」

2回目で確信持つて、3回目でこの通りつて奴だ。」

2回目の段階で巴の跡をつけても良かったのではあるのだが。特に関わる事ではないかな、と放置していたのである。

「じゃ、じゃあ何で今日は……？」

「なんつっーかなあ……虫の知らせ？」

頭を搔きながら答える翔太。

実際そうとしか言いようが無いのだからしょうがない。

「兄ちゃんと姉ちゃん、そろそろええか？」

「うおっ、鬼が喋ったっ!？」

煙が晴れ始め、こちらを取り囲んだ鬼の一体が話し掛けてきたのを

驚く翔太。

「まあ、式神ならまだしも召喚された鬼ならそりゃ喋るよ。」

「そんなもんかよ……しかし、本気で実在するとは思わなかったぜ。」

にっと笑う翔太。

「それはええけどや。坊ちゃん一人助けに来てどないかなる思うてるのか？」

鬼の言う事も最もである。

数だけで言うならば、今だこちらに分はある状況。

ましてや、助けに入ってきた人間は裏側に詳しくは無いと推察できる。

下手すればただの足手まといにしかない、と言う奴だ。

「お前らの間違いは3つだ。

1つ、どうにかなる所かお前らはすでに死んでる。」

ざわめく鬼達。

「2つ、俺は坊ちゃんと言われる歳じゃねえ。これでも14歳だつ！」

「ガキに違いはないやろうがっ！」と血気盛んな別の鬼が突っかけてくる。

「3つ、こいつは女じゃなくて男だぜ？」

それよりも早く翔太が両手の指を動かした次の瞬間、取り囲んでいた鬼達が切断された。

「ぜ、全滅だとう！」と驚愕してる陰陽師。

「〔忍法・風斬〕。俺の刃は敵味方の区別無く容赦なく切り刻むぜ？」

とは言っているが、その実は煙玉を叩き込んだ時にそつと鬼達に鋭利なワイヤーを

巻きつけて置き、それを引っ張っただけである。

敵に気づかれずにワイヤーを巻きつけ尚且つ引っ張るだけで切断するその手練こそ

恐るべしと言った所なのではあるが。

我に返った陰陽師が逃げ出すのを一足飛びで追いつき、組み伏せる。

「で、こいつどうするよ？ やっちまうのか？」

「駄目駄目っ！」

手元から黒く細い刃を持つ短剣を抜き出しながらそう聞く翔太を慌てて止める巴。

何だそうか、と首筋に柄で一撃。気を失う陰陽師。

「いやよかった、流石に人は殺したくねーからなあ。」

「思いつきり殺す気満々だったように見えるけど……………」

ほっとしながらもジト目で翔太を見る巴。

少なくとも、短剣を抜き出したときの彼は本気だったと確信している。

「必要ならやるけどな。とは言えやらないに越した事はねーよ。」

そう言いながら、陰陽師の関節を外していく翔太。それを見て慌てる巴。

「ちょ、ちよつと何やってんのさ？」

「いや……………ロープ持ってねーし。目を覚まして暴れられても困る  
だろ？」

ま、こんなもんだろと手足の関節を外し終わった後。

「……………で、何で巫女服なんだよよりもよって。」

「しょ、しょうがないじゃない……………これが戦闘服なんだから。」

顔を赤くする巴。こういう時はいつもこの格好とは言え恥ずかしい時は恥ずかしいらしい。

そんな彼を見て「と言つか、似合いすぎだろう……………」と呟く翔太  
がいたりする。

「しかし、まさか鬼が実在するとはなあ。」

「しょーちゃん、その事なんだけど……………」

ん？と振り向く翔太に扇を突きつけようとする巴。

それよりも早く巴の手首を取り、ねじり上げる翔太。

「……………どういいうつもりだよ！？」

「一応、こっち側を知っちゃった堅気さんは記憶を消すのが規則なんだ。」

できれば抵抗せずに記憶を消させてもらえると嬉しいんだけどな…………

……………」

ねじり上げられてる痛みを堪えながら翔太に告げる巴。  
それを聞いて翔太は不機嫌になる

「オレが誰彼構わず話す奴に見えるか？ どちらにしる信用されないだろうさ。」

「それでも、念には念を入れてって奴だよ……………隠匿は大事だってね。」

巴の言っている事は事実である。

例外を作る事になれば、そこからなし崩しに決まりは有名無実な物となってしまう。

それを巴は危惧しているのだ。

「折角助けたつてのにっ！！」

「それとこれとは話が別だよっ！！」

ねじられた手を振りほども、巴は間を取り直す。

扇は片方しかないがそれで十分、距離は彼にとって一足ではあるが魔法障壁を打ち破る手段

までは恐らく存在し無いだろうと判断。

とは言え、彼曰くの『忍術』がどんなものか分からない以上は迂闊に攻められず。

無論、攻撃魔法をぶつ放す訳にはいけないので『戒めの矢』か『眠りの霧』になるだろうが。

とにかく相手を拘束して記憶を消してしまう必要がある。

例え友人とは言え、だ。

翔太としてはこの一戦は本意である。

何が悲しくてクラスメイトでありルームメイトである彼とこんな事

をしないとならんのか。

とは言え、記憶を消されるといふのは真っ平御免という話であり。介入するまでの戦いを全て見ていたわけではないが、少なくとも防御力だけはあると判断。

あの質量の金棒を喰らって重傷になっていないのがその証拠。とは言え、相手が何をしてくるかはその未知数。

静まり返った戦場跡でにらみ合う事数分。

静寂を破ったのは一発の銃声と、それを弾く刃の音。

そして、状況は再び動き出す。

スナイパー・龍宮真名は驚きを隠せないでいた。

救援要請があつたポイントに相手である桜咲と到着したのがついさつき。

魔法生徒が何者かと交戦している - 今は睨みあっているだけだが - のを確認したのが少し前。

そして支援するべく桜咲が動き出し、自分が発砲したのが今しがたである。

本来ならばこの一弾で相手は倒れ、状況は終了していたはずだ。

ところが実際はどうだ。いつの間にか抜き出した刀 - 忍者刀と呼ばれる部類の物だ - に

銃弾は切り払われていたのだ。

神鳴流の使い手か？とも思ったがあのような黒ずくめと武器で剣士、と言う訳でも無いだろう。

何故かクラスメイトの1人が脳裏に浮かぶ。主に忍者的な意味で。

そこに瞬動を以って斬りかかる桜咲。それも身軽な動きでかわされる。

そもそも黒ずくめのサイズが小さいのだ。丁度クラスメイトの双子と同じか小さいくらい。

……… 何かが引つかかったが、恐らく気のせいだろう。

それに、余計なことを考えてる場合ではない。

次弾装填。

隙あらば撃ちこむ為に、戦闘の流れを注視する。

刀と刀のぶつかり合いになるか……… と思ったがそういう風にも見えない。

一方的に刹那が斬りかかるのを避け、捌いているのが実体である。しかも、こちらからの狙撃を警戒しているのか桜咲を遮蔽物にする形で。

互いに間合いを取れば発砲のチャンスもあるのだろうが、それも見られない。

刀で相手するにはやや不利な間合いを離れずにいるという感じた。

魔法生徒の方は桜咲の支援に動く訳ではなく、むしろ二人を止めようとしている感がある。

……… 実は侵入者ではない、と言う事なのだろうか？

とは言え、こちらで勝手に判断をする訳にもいくまい。

連絡を取ればいいのだが、念話の類は行使できずまたその手のアイテムを使うには

今の狙撃姿勢からでは不可能である。

結局の所、侵入者であろうと無かろうと一発叩き込むしかないわけだ。

まあ、桜咲が問答無用で斬りかかっている辺りを見れば侵入者なのだろうが………。

そうこうしていると、徐に黒ずくめが間合いを取る。

同時に辺りを覆い尽くす白い煙。

目くらましか、と思いながらも彼女の『魔眼』はその程度では誤魔化せない。

森に木霊する銃声は3度。

無力化させる為に手足を狙った3発のうちの1発に手ごたえを感じる。

しかし、無力化にまでは至らなかったらしくそのまま気配ごと姿を消した事を確認する。

『魔眼』ですら捉えきれないとは、と感嘆する。

撤退したと見せかけて………と言う可能性を考慮して、警戒すること数分。

この場にはいないと確信して警戒を解き、なにやらぎゃいぎゃいやつてる二人に近寄る。

「アンノウンは去ったようだが、何を揉めてるんだ？」

そう聞いた龍宮が二人の意見を総合するところなる。

1・彼は私のクラスメイトで不審者じゃない（巫女）

2・あれだけの腕前で尚且つ抵抗するなら不審者だろう（桜咲）

3・誰だっていきなり問答無用で斬りかかれたら抵抗しますって

（巫女）

4・不審者じゃないなら抵抗せず大人しく縄に付けばいいだけの話

（桜咲）

5・話も聞かずに切りかかったのは桜咲さんじゃないですか（巫女）

「つまり………助けに来てもらった堅気のクラスメイトの記憶を消そうとして

膠着状態に陥った所で、私達がクラスメイトを侵入者と勘違いした

という事か？」

再びぎゃいぎゃい始めそうな二人を抑える様に龍宮が確認する。

「例え侵入者じゃなくてもあれだけの事ができて堅気な訳が無いだろう！

やはり西の刺客か何かでは……………！！」

「だから何でもかんでも刺客にするのは止めましょうよ！私のクラスメイトなんですよ！！」

「クラスメイトだろうが何だろうがお嬢様に仇名す可能性がある以上は見過ごせないと言ってるんだ私は！！」

「……………いいから二人ともちよつと落ち着け。深呼吸だ。」

いつから私は仲介役になったんだ、と溜息を付きながら龍宮は考える。

確かにあれだけの戦闘力を見せられて「堅気です」とは弁解できないだろう。

とは言え、自分のクラスメイトにも常人を突破した戦闘力がありながら「裏」については

全く知らない人間がいるわけで……………

まさか、桜咲の奴自分のクラスメイト全体を潜在的な脅威と捉えているんじゃないだろうな、

いやまあボディガードとしては間違っではないだろうが、と思いつつ。

「とにかく、今は巫女君のクラスメイトを探す……………いや、後日接触する事が先決だろう。

最終的な判断はこれから学園長に仰ぎに行く必要があるだろうけど

ね。」

「今から追いかけないのか？」

「明らかに忍者忍者した人間を夜間に無事に見つけ出せるとは思えないね、私は。」

下手をすればトラップに引っかけたて酷い目に遭いかねない。

その手のトラップの設置・解除はお手の物だが勝負をする気は無い。その辺は桜咲も分かったのか「それもそうだな。」と納得する。

「とにかく状況は終了した。報告の為に戻る事に……………どうした？」

龍宮に話を振られ、暗い顔の巫女が答える。

「必要だったとは言え、こうなったらどんな顔してしょーちゃんに会えばいいのかな、って。」

しょーちゃん、こと駒井翔太は樹の上で目を覚ます。

太陽はすでに昇りきり、大体昼くらいだろうか。

腹も減ったのでどこかで食料を調達する必要があるだろう。

あの後、追っ手が来ても大丈夫なように偽装工作と罠を仕掛けつつ後退し、

落ち着いた辺りで傷の手当・肩に一発貰っていた・を行い寝たのが朝日が昇る少し前。

バイト先無断欠勤やつちまったなあ、と溜息を付く。

と言うか、この一件が解決しない限りは学校も無断欠席の訳で……

…溜息しか出ない。

楓とも会えない訳で……………大きく溜息を付く。

そもそも、何をもってして「この一件が解決」と言うのか。  
大人しく自身が記憶を消されれば解決、だろうがそれは御免だ。  
何故自分の記憶を他人に無理やり弄られないとまらないのか。  
無論、自身がそれを望むのならまだしも、だ。

敵は少なくとも3名、一発喰らわされたスナイパーと人斬りストーリー、そしてルームメイト。

……溜息を付く。

何が悲しくてあいつとこんな事しないとならんのか。

そして、やっぱり人斬りは人斬りだったか、と。

当然の事ながら、あちらの戦力はこれだけではあるまい。

どういう目的で何をやっているのかは不明と言うより情報不足だが、その前に交戦した鬼の事、

そして人斬りの「やはり貴様西の刺客か！」と言う発言を繋げれば何となくはわかる。

恐らく、常人には計り知れない領域で東と西は戦争状態にあり、その余波がこの麻帆良にも

影響しているのだろう。しかし、いつ西日本と東日本は戦争を始めたのか？

やはり、西日本は大阪を首都にして「オオサカベン」が公用語になるのだろうか？

戦争と言うよりはヤクザの出入り、と言う気もしないでもないが。

……まあ、あれも戦争と言えば戦争だし大差無いだろう。

ほとぼりが冷めるまで、と言いたい所だが当事者の1人が友人の段階でそれも無理。

やべえ、オレ完璧に詰んだんじゃないの？と溜息を付く。

とは言えここでノコノコ出て行くわけにも行かない訳で……溜息

が止まらない。

ともかく、腹も減ったし何か適当に調達するか。  
そう考えた翔太は動き出す。

長瀬楓は憂鬱であつた。

婚約者である駒井翔太との連絡が途絶えて約一週間。

彼のバイト仲間である神楽坂に聞いた所「え？風邪を拗らせて休み  
つて聞いているけど？」と

言う答えが帰ってきたがそんな話は自分は聞いていない。

クラスメイトでありルームメイトである巫女巴を捕まえて聞こうと  
も思ったが、向こうから

避けているのか捕まえられず。別のクラスメイトに聞いてみたがや  
はり風邪だと言う。

どこから聞いたのか、と訪ねればルームメイトからだ。

あからさまに怪しい。

怪しいと言えば、自身のクラスメイトの龍宮と桜咲でもある。

特に桜咲はやつた実戦講座の方もキャンセルし、何と言うか敵対  
的対応一步手前の様相。

龍宮の方も何か聞きたそうでどう聞いたものか、と言う顔をしてい  
ることがある。

実際の所は和解（と言うか話し合い）に向けて動き出したい学園側  
が彼に気を使って工作を

行っているのと、楓とどう話をしていいか分からない巴、楓に話を  
持っていきたいが彼女が

どこまで知っているか分からない以上は迂闊に話を持って行けない  
+聞けない桜咲と龍宮、

と言う事情があるのだが、そんな事を楓が知るよしも無く。

どうした物かと悩んでいれば他のクラスメイト・特に鳴滝姉妹・に  
心配される始末。

手がかりも無い以上、地道に足を使って探すしかないと言う結論  
に達したのがつい先ほど。

幸いにして明日は日曜日であり、探す時間はそれなりに確保できる。  
まずは山からでござるないつもの修行場所へと足を運んで。

「よう、久々だな。」

と飯を炊いている翔太を見つけて思わず「何をやってるでござるか  
っ!」と飛び蹴りを

叩き込んだ彼女を責める訳にもいかないだろう。

「本当に心配したんでござるよ……………」

「わりい、迷惑をかけるわけにも行かなかったからな……………」

感動の再会から十数分後。

食事を取りながら二人は話し合っていた。

楓の目が若干赤かったり、翔太の頬が赤くなったりするのは恐ら  
く気のせいであろう。

「で、一体全体何がどうなってるでござるか?」

「それなんだがな……………」

喋ろうとした所で二人同時に同じ一点を見る。

楓がやって来た道だ。

「……………すまんでござる。」

「全く、お前らしくないぜ?……………いや、オレのせいだな。」

最も、つけられる事自体が楓にとっては予想外だったともいえる。  
どちらにせよ、本調子でもなかった訳だが。

沈黙。

木々のざわめく音。

いつまでその静かな世界は続いたのだろうか。

それは、翔太の一言で破られる。

「いいから出て来いよ。とっくに分かってるんだからよ。」

「……………やれやれ、気配を殺すのも必須科目なんだけどね。」

そう言っ出てきたのは龍宮であった。

両手は上に。ついでに言えば片手には白旗代わりの白いハンカチを  
持っている。

「あくまで私に戦う気は無いよ? 正確には話し合いに応じてもら  
いたいんだけどね?」

全く、何で私がこんな事をとばやく龍宮を横目に忍者2名は気配を  
探る。

少なくともこの辺りに潜んでいる様子はない、と確信する二人。

「で、誰と何を話すんだ?」

「君が停電の日に見た事聞いた事について、学園長とだ。」

学園長? 何故に学園長が出張るのか?

『麻帆良学園都市』とは言え行政を行っているのは市長であり、市役所だ。

それともあの戦いは学園闘争だったというのか？

どちらにしろ、拒否権はないに等しい。

学園長が出てくると言う事は、最悪この学園全体が敵に回る。

「言っておくが、楓は……………」

「本来なら、楓が去った後で接触するつもりだったんだけどね。

こうなったら一人も二人も同じだろうさ。一緒に来てもらうことになると思うが……………」

「無論でござる。」

「……………おい。」

龍宮の発言に「冗談じゃない」と言いかけた所に楓の台詞である。

翔太としては何が起るか分からない事態に彼女を巻き込みたくはない。

「何、ここまで来れば一蓮托生と言うやつでござるよ。

それに、翔太殿と一緒にならばどこへでも行けるでござる。」

「すまねえ……………」

もはや謝るしかない。

愛してる女を護るところか、危険に晒そうとしているのだから。

そして、結論から言えば、話し合いは実に穏当に終了した。

睨み合いになることも無ければ、一触即発の空気になることも無く。内容的には魔法・魔法使いの存在、麻帆良と関東魔法協会、魔法先生に魔法生徒、

敵対勢力の存在 e t c……………の所謂「裏側」についてのお話。

それを踏まえてウチで働かないか、と言う勧誘。

「堅気が関わったら記憶を消すって巴が言ってたけどよ?」

「何、関係者になってしまえば記憶を消す必要も無いじゃろう?」

などと言うやり取りも挟みつつ。

無論、それだけの戦闘力を持っているからこそその勧誘である訳だが。その辺は翔太も理解している。

「で、オレは…… オレ達はその『魔法生徒』とやらになんのか?」

「どちらかと言えば傭兵的扱いになるのかのう。龍宮君がそうなんじゃが。」

そうなの?と言う感じで部屋にいた龍宮に眼を向ける翔太と楓。頷く龍宮。

「ま、払うものさえ払って貰えればどんな依頼でも受けるけどね。」

「これも依頼かよ?」

「当然じゃないか。」

だったら微妙に失敗じゃないのかと翔太は思ったが口には出さない。恐らく連れてくるのは自分一人で、楓は人数外だったのだから。

「オレはそれでも構わないけどよ……」

「ここまで来て拙者を置いていくのは逆に失礼とは思わんでござるか?」

今だ踏ん切りのつかない様子の翔太。

楓もその気持ちは分かるのだが、ここまで聞いて知らない振りをする訳にもいくまい。

「オレは楓に怪我とかして欲しくねーんだよ。」

「拙者として翔太殿に怪我なんかして欲しくないでござる。それに、このような思いをするのは

もう沢山でござるからな。何と言われようとも一緒にござる。」

決意の固い楓の表情を見て、翔太は説得を諦めた。

あの顔をした彼女の意見を翻すのは不可能に近い。

溜息を一つついて学園長の方を向き直り。

「つーわけだ。」

「ふむ、では細かい話を詰める事にしようかの。」

そして話し合いも終わり、面通しやは後日となって解散となる。  
魔法使いや魔法についての詳しい話はルームメイトに聞けばいい、  
と言われ。

「……………オレ、あいつにどんな顔して会えばいいんだ?」

と頭を抱える翔太がいたのはお約束。

最も、双方ごめんなさいの謝罪で（割と）あっさりと話がついたのだが。

何はともあれ、翔太の苦難はこれからである。

何しろ、1週間休んだ分の授業に追いつく為の勉強をしなきゃならなかったのだから。

おまけ。

学園長室からの帰り。

「そっぴや怪我と言つてたが、実はあん時肩に一発貰つててな……」

「ああ、私の一発だね。………3発撃つて1発しか当たらないとは思つたものさ。」

「どうやって避けたんだい？」

「………殺気だよ。後、ご愁傷様。」

微妙に距離を離す翔太をいぶかしむ龍宮。その疑問はすぐに解けることになる。

肩をガシッと掴んだ楓の存在にて。

「真名殿、少し拙者とお話をする必要があるようでござるな………」  
「………私には全くその必要性は感じられないんだがね。」

冷や汗を流しながら何とか逃れようとする龍宮。  
しかし、にげられなかった！

「何、それほど長い時間ではござらん。と言うわけで翔太殿は先に行つて欲しいでござる。」

「あー、ほどほどになー。」

4人の楓にドナドナされていく龍宮を思わず敬礼で見送ってしまう翔太であつた。

## 第五巻：裏との遭遇と不本意な結果でござる、の巻（後書き）

後半がちよつとダイジェスト気味になってしまった（汗）。  
あまりだらだら交渉風景やってもしょうがないな、と。

何かせつちゃんが悪化してる上に扱いが悪い……………ごめん。  
後、なぜか待遇のいいたつみーw

### > 襲撃

1・よく関西の面子が「東許さん！」とか「木乃香ゲットだぜ！」  
と言わんばかりの勢いで  
麻帆良に来襲してきますが、西は攻められないんだろうか？w  
東のはねつかえりが逆にカチコミに来て驚かないんですww  
それとも関西呪術協会なんて落ち目なんだよと思われるのか。  
単純に「西の総本山の結界マジパネエ、これ無理っすよ。」の可能性もありますけど。

まあ、二次創作設定と呼ばれる部類のもんなんで突っ込むだけ野暮ですがw

2・突発的アクシデントで停電したのならまだしも、毎年2回発生  
する停電なんだから

麻帆良側も対策取れて話ですよw

エヴァンジェリン封印結界は自家発電か何かで賄ってるみたいなんだしさ。

……………それとも、最低限の結界は展開できるようにしてるんだろうか？

しかし、エヴァの魔力を封印できるだけの結界が停電時でも展開できるなら、麻帆良を守る

だけの結界も何とかかなりそんな気はするんですよえ、実際。

何かネギ魔の方がどつかでも同じ事書いた気がする。

> 眠り薬

魔法で眠らせてもいいんですがね、バレるとオコジョだからw

> 坊ちゃん

14歳は十分「坊ちゃん」だと言う気はします。

> 風斬

そつと巻きつけるくらいならそこで始末しまえよ、と言うツッコミはなしでw

と言うか、あの手の糸やワイヤーを巻きつけて云々って技はどうやって巻きつけてるんだろう？

魔法使いとかなら糸に何らかの力をまわせて動かしてる、でいいと思うんだけど。

> たつみー

対魔物用と対人用を切り替えるわけにはいかないんで、どんな弾使ってるんでしょうね？（え

祝福儀礼が施されたゴム弾とか使ってるんだろうか？……………まさかそれとも、麻酔弾用してるのか……………いやいや、それじゃ人以外が倒せん。

それともサーチアンドデストロイなのか、麻帆良防衛網。

これを考えるまで俺はてつきり「倒しはするが殺さない」だと思ってたんですが何故かw

ライフル弾喰らったらショック死くらいしそんな気はするけどw いやまあ、口径とか弾種にもよるでしょうけどさあ。

どちらにしろ二次（ry）

> 潜在的脅威

少なくともエヴァンジェリンさんは本気で脅威だから困る（武力的な意味で）。

実際の所「お嬢様を守りに来たら、賞金首にもなった真祖がクラスメイトにいてござる」

とか割とテンパってもいい展開だと思うw

むしろ、学園長に殴りこみかけてても驚かないwww

> どんな顔して

たつみ「笑えばいいんじゃないか……悪かった、詠唱するのは止めてくれ」（おい

> 十数分後

何があったかはご想像にお任せします（え

いや別にエロイことがあったわけではないんですけどw

> 学園都市と行政

あくまでも学園都市は「研究、学術が産業や文化で大きな役割を果たしている」と目される都市」

（みWikiさんによる、学術都市の解説ですが似たようなもんです）であって、行政自体は

自治体が運営してるはずなんですよね。そのレベルで魔法使いが浸透してるんでしょうけど。

> 関係者になつてしまえば

学園長がこんなだからネギのところがあんな事になるんだよ！（待て

>魔法生徒

二人とも忍者なので（おい。

**第六巻：強襲、子供先生でござるの巻。（前書き）**

さらに年代ジャンプは続く！

原作時間まで進めたかった、反省はしない。

## 第六巻：強襲、子供先生でござるの巻。

「あつという間に2月でござるなあ。」

「もう2年も終わりだからな。時が経つのもはえーよ。」

スターブックスのオープンカフェでくっちゃべってる男女が一组。傍目から見れば姉弟か、親戚の子を連れて歩いている女子高校生に見えるだろう。

無論、そんなわけは無く。

甲賀中忍・長瀬楓とその婚約者にして我流忍者・駒井翔太の二人である。

「学園祭も盛況だったでござるしなあ。」

「もー二度とお前のクラスにやいかねーからな。」

「何故でござるかっ!？」

テーブルに突っ伏すように語る翔太に抗議する楓。

「だってよー、お前らのクラスのテンションぜってーおかしいだろー。」

女子中学生の合体パワーを舐めてたと言うか……………」

「あー、まあ、それに関してはお気の毒でござる……………」

溶けそうな口調と虚ろな目をする翔太に、目を伏せて遺憾の意を述べる楓。

「と言うかおめーのせいだろうこのバ楓っ!」

と吠えるように翔太が言うのも無理は無い。

元はと言えば楓が「彼が拙者の婚約者でござる」などと紹介したのが問題であった。

しん、と静まり返る教室。そして「ええー！」と言う大音量の驚愕。無論知っている人間もいたのだが、それでも知らない人間の方が圧倒的だったといつてよい。

楓自身もそれほど吹聴する趣味も無かった訳であるし。

「は、初めて知ったです。」

「圧倒的なラブ臭の発生の理由はここにあったなんて……………!!」

何しろ図書館探検部でも知らなかったわけであつて。

「アスナは知ってたんやなー。」

「ちよつとバイトの時にそういう話になつてね。」

そういう意味では神楽坂明日菜は貴重な知っている人間であつたりする。

「なるほどね……………それなら納得できる。」

とある日の『お話』を思い出して身震いをしてしまった某巫女スナイパーがいたり。

最も、そこからが修羅場だったのだが。

「是非インタビューを、と言つか拒否権は無いから!」と某報道部パパラッチが突撃したり、

「楓姉どうして黙ってたですかー」「ひどいですー」と某双子姉妹が暴れたり、

「そうですね、長瀬さんの……………残念ですわね」と某委員長が残念そうな顔をしたと思つたら

「いや、翔太殿は拙者と同一年でござるよ?」と言われてクラス一同驚愕の声を上げる中

「そんな、私のセンサーが誤作動をつ!？」と崩れ落ちたり。お前ら学祭の出し物は?と突っ込みたくなるようになってんやわんやぶりだったのだ。

「はっはっはっ、照れるでござるな。」

「誰も褒めてねーよ。」

明後日の方向を見つつ笑って誤魔化そうとする楓に突っ込む気力も無いのか、再びテーブルに突っ伏す翔太。

「夏の海水浴も面白かったでござるしなあ。」

「おのれ鳴滝姉妹っ! 貴様達のせいでオレのデートプランは破壊されてしまったっ!」

「ま、まあまあ、落ち着くでござるよ。」

海水浴の話に移った途端がばっ、と身を乗り出して叫びだす翔太を抑える楓。

正直オーブンテラスで叫ぶ内容ではない。

実際の所二人きりでプールか海か………プールもなんだし海水浴にでも行くか、と言う話になっただのであるが。

「海ですー!」

「お世話になるですー!」

鳴滝姉妹がくっ付いてきたりしたのである。

「まあ、拙者だけが海に行くというのも……………と言つ話でござって何、翔太殿とは

いつでも二人きりになれるではござらんか。」とは楓の弁。

「お、オレとしちゃ楓とデートのつもりだったのに子供が二人もついてきやがった……………」

「子供じゃないですー!」

「と言つかしよーたには言われたくないですー!」

と鳴滝姉妹との温かい交流があつたり。

「逆に考えるでござるよ翔太殿。『これ以上拙者のクラスの人間がいなくてよかつた。』

そう考えるでござるよ。」

「考えられるかっ!」

などと言つやり取りがあつたり。

とにかく親戚の子供三人をつれて海水浴に来た女子高生の図、みたいになったという事である。

オチとして海水浴から後日、双子経由で再び某パラッチが襲来したのだが余談であらう。

「まあ、その件に関しては拙者も反省しているでござる。」

「……………次こそは二人きりだからな。」

「……………承知でござる。」

微妙に顔が赤い二人。某生体ラブ臭センサーがいればその濃度に倒れている事だらう。

「体育大会やらもつつがなく終わったしなー。」

「相変わらず人外魔境でござったがな。」

麻帆良における体育大会はまさに人外魔境、と言ってもよい。

徒競走で世界記録が塗り替えられる、訳ではないが極めて非常識なハイレベルとも言える。

無論魔法の類を使っているわけでもなく、純粹に『氣』を無意識レベルで活用している生徒が

多いだけの話ではあるのだが……。

「と言うか、障害物競走とかどこの軍事キャンプだよって状態じゃねーか。」

「その障害物競走で一位を取った翔太殿に言われたくはないでござる。」

壁を登り、堀を這い進み、棒の上を落ちないようにバランスよく駆け抜けて。

軍事キャンプでなければバラエティ番組の企画のようなコースだった訳だが、難無く翔太はクリアして1位を取ってたりする。

盛り上がる会場の隅で「ありえねーよ、どこの忍者だよあいつ……」

……と

某隠れネットアイドルが呟いていたかどうかは定かではない。

「しかしアレでござるなあ、巴殿は絶対反則でござるっ………」

「……………あー。」

部活動対抗リレー。

その名の通りリレー競争で部活動同士が対決する、と言つやつである。

お約束として剣道部ならフル武装、柔道部なら柔道着、相撲部ならまわし一丁だったり

部活動ならではの格好をして競技に挑む訳であるが。

演劇部所属にして翔太のルームメイト巫女巴は……

「まさかウェディングドレス姿がそこまで似合うとは思わなかったでござる……」

「想定はしてたんだがな。まさかその想定を斜め上で突破されるとは思わなかったぜ。」

姿を見せた瞬間、ほうと溜息のような声が上がった、と言つ辺りで察していただきたい。

「本人は『似合つてると言われても嬉しくない』って言ってるがな。」

「……女としてはちとショックではあるでござるな。」

「気にすんな、お前が着た方が100倍似合つてよ。」

「つまり、祝言は洋式がいいって事でござるな？」

「そーじゃねーよ。てか、どっちもやりやいいだろうが。」

などと先の早い話が繰り広げられ始めていたりする。

「と言うわけで拙者は子供は3人は希望したい所でござるが……そうそう、話は変わるでござるが担任が変わったでござるよ。」

「えらい話の方向転換っぷりだな、おい。今物凄い勢いで話がドリフトかましたぞ？」

そう言えば、神楽坂も今朝そんな事言つてたな……『愛しの高畑

先生がー！』って。」

遅刻しただけで珍しいのに、妙に不機嫌だったのを覚えている翔太。

「『あのガキンチョのせいでー！』とか言ってたけどよ……………」

触らぬ神になんとやら、で詳細は聞かなかったけどな。」

「それでござるな。高畑教諭に代わって着任したネギ先生でござる。」

「葱？根本？妙な名前だな。」

「イギリスから来たと言ってたでござるが……………」

そうか、外国人と日本人のハーフか何かか、と考える翔太。

「イギリスといや、巴の方から『あつち』絡みで連絡が来てたな。

魔法使いの修行とやらでこっちで教師する奴が来るっての。

確か、そいつもネギって言ってたな……………おう、間違いない。」

懐からプリントを取り出して確認する翔太。

拙者、そんなプリント貰ってないでござるよ？いやオレが渡す訳だし。

などと言うやり取りと共に楓もプリントを確認する。

「と言うか、このネギ・スプリングフィールドでござるよ。」

「数え10歳とか本気でガキンチョだな……………おい。」

写真つきのそのプリントには「魔法関係者は現時点において事情無しに魔法使いまたは

それに順ずる立場で彼に直接接触する事を自粛するように」（要約）と書いてあったりする。

「ようは『魔法使い』として早く独り立ちしろよ、って事か？」

「ちとスパルタでござらんか？」

「それだけ期待してる、と言うか早く育って欲しいんだろ？  
ま、最低限のケツ持ちくらいはするだろうけどな。」

だとすると……と考え込む楓にどうした？と尋ねる翔太。

「いや何、ネギ坊主、初っ端から不審でござったからな。  
落下した黒板消しが頭の上で一瞬停止したでござるし。」

「……………おい。」

大丈夫かその魔法使い、と他人事ながら不安になる翔太。  
その不安は後日、確定的になる。

「と言うわけで魔法使いな巴に聞くんだが。」

「え？えっ、何唐突に？」

時は進み数日後。自室で朝食を取る駒井翔太と巫女巴の二人。

「魔法使いつてのは隠匿意識が薄くてもやっていけるのか？」

「えーと、どうしてそんな事を？」

「いや、楓から聞いたんだが……………」

と某子供先生についての話（伝聞）を話し始める翔太。

曰く、彼がくしゃみをしたら明日菜殿の服が脱げてた。

曰く、ドッチボール大会で彼が高校生に投げつけたボールが服をひ  
ん剥いた。

等等……………

「……………うわあ。」

思わず額を押さえる巴。

事実確認を行った訳ではないが、事実ならばこれはひどいのオンパレードと言える。

「と言うか、ただのラッキースケベにしてもうらやまけしからんって感じじゃねーか。」

「羨ましいのかけしからんのかどっちなにしようよ……………」

と言うか、羨ましいとか言ったら長瀬さんにぼっこじゃない？と突っ込む巴。

「与太はまあ置いておいて、だ。

前に貰ったプリントに書いてた簡単なプロフィールにや、魔法学校飛び級主席卒業、とか

書いてたが……………あれか、見習い魔法使いって言うのは主席でもこんなもんなのか？」

「ま、まあほら。まだ数え10歳の子供だしさ、少々は大目に見ようよ、ね？」

一応フォローは入れる巴。

「セクハラ教師、って書く途端に懲戒もんだぜ？」

「うつ。で、でもほら、教師としてはちゃんとやってるって聞いているよ？」

「やってなきゃ本気でただのセクハラ教師じゃねーか。

……………いやまあ、年齢考えると悪戯好きのガキンチョでもいい気がするが。」

楓の発言を総合すると「変態という名の紳士」か「紳士と言つ名の  
変態」でもいい気はするが、  
と内心思っていたりする翔太である。

「まあ、それはさておいて……………だ。」

もし楓に何かやらかしたらオレはぼっこにしに行くからな。」

「いきなり宣戦布告!？」

「当たり前だろーが、好きな女そんな目に合わせられて黙ってる訳  
にもいかんだろう。」

むしろ、先手を取ってもぐか?などと物騒なことを考える翔太。

「しょ、しょーちゃん?ちよつと冷静になろう、ね?」

「オレはこれ以上も無く冷静だぜ、頭は冷静に心は熱く、ってな。」

と言うわけでちよつともいで来る、と出かけようとする翔太と、そ  
れを止めようとする巴の

間で一戦おつ始まったわけではあるが双方KOで終了した事だけ  
述べておく。

「そーいやよ……………」

「何、しょーちゃん……………?」

「オレ、そいつがどこに住んでるのかしらねーわ。」

担任やってる2・Aの生徒の部屋で住んでるよ、とは言えなかった  
巴であった。

第六卷：強襲、子供先生でござるの巻。（後書き）

微妙にタイトル詐欺でした（こら。

第七卷：馬鹿共が図書館島で夢の跡でござる、の巻（1）（前書き）

忍者強化月刊、と言っわけではありませんw  
どっちかと言つと現実逃避じゃるか？（おい

## 第七巻：馬鹿共が図書館島で夢の跡でござる、の巻（1）

期末試験。

中間試験に並ぶ学業のイベントである。

2年の3学期の期末ともなれば3年時、そして高校受験への影響も濃くなってくるのだが…………

「全体的に緊張感ないよねー。」

「そりゃ巴つちよ、エスカレーター式で高校に上がるのにテスト頑張る奴はいねえだろ？」

「…………ここに一人いるけどね。」

麻帆良男子中等部2 - A。

巫女、富戸山、長井の三人がのんびりと会話してる中、勉強してる男が一人。

「何だ、悪いかよ？」

駒井翔太その人である。

「いやいや、勉強に勤しむのは悪いことじゃないぜ翔つち。」

「そう思うならお前もやれよこの太つちよ。」

そう言いながら疲れた目を押さえ、天を仰ぐ形で小休止する翔太。

「…………でも、多分翔太君ぐらいだよ？このクラスで真面目に勉強してるの？」

「しゃーねーだろ、親が煩いんだよ親が。」

長井の言うとおり、他のクラスメイトはまったく通常運行にも関わらず翔太一人が

真面目に勉強しており……非常に浮いている。

「もしかしてしょーちゃん、飛び出してきた口？」

「もしかしくなくても飛び出してきた口だよ。その分成績は納得させるだけのもんは

出さないとならねーんだけどな。」

それに……と、続け。

「楓にも教えなきゃならんし。」

「くそ、翔つちのリア充め。」

「……………もげろ、って奴かな？ まあ、僕はそれほど興味ないけどね。」

実際の所、学祭の折に楓が来た時はクラスメイトがパニックを起こしたほどである。

「何でこんなスタイルの美人がこんな所に！」 「何、翔太の知り合いだとー！」

「しかも婚約者、だと……………（ごくり）」と言うのが簡単な流れである。

「リア充め、全滅にしてやるー！」と殴りかかってこようとする奴、  
「嘘だそんな事！」と

オンドウル語で絶望の声を上げる奴、「この俺の目を持ってしても見抜けなんだとは……………」

と啞然とする奴。まさにカオスな空間が形成されたと言っていい。

「いやあ、流石の拙者もドン引きでござるよ」とは楓の弁。

「でも、そんなに成績悪いの？楓さんって？」

「あいつ、昔頃から勉強苦手だからなあ……………」

昔を思い出しながら答える翔太。

思い返せば小学校の夏休みの宿題から一緒にやっていた記憶がある。

「だから何で最終日まで溜め込んでるんだよ！」

「いやあ、夏の醍醐味と言えはこれでござる。」

「こんな醍醐味いるかあつ！！」

などと言つ心温まる会話が毎年のように繰り広げられた物であったのだ。

「なあ、翔つちよ……………」

「どった太つちよ？」

そんな思い出話を聞かせると、富戸山が微妙な顔をしながら突っ込みを入れた。

「一緒に初日からこつこつやっていけばよかったんじゃないか？」

「……………あ。」

小学校6年間＋中学1年間、全く気がつかなかった解決法に翔太は啞然とした。

時間は過ぎて夜。

翔太は1人、夜の道を歩いていた。  
散歩と言う訳ではない。

「実はちと手を借りたい事があるんでござるよ。」

と言う楓の救援要請を受けての出動なのであるが…………。

「何でこの夜中に図書館島なんだ？」

そう、待ち合わせ場所は図書館島。

日本最大、いや恐らくは世界最大の図書館と言っても過言ではないそこ。

翔太の所属する図書館探検部の活動の舞台でもある。

しかし、楓と図書館の組み合わせにピンと来ない。

遂に勉強に目覚めたか！とも思うがこんな夜中に来る理由が見当たらない。

本人に聞けば分かるか、と棚上げておくことにする。

図書館島前に到着すると、見覚えのある顔ぶれと初対面の知ってる顔が一人いた。

図書館探検部の面々・綾瀬夕映、宮崎のどか、早乙女ハルナ、近衛木乃香・に長瀬楓、古菲、

佐々木まき絵、さらには神楽坂明日菜と彼女たちの担任であるネギ・スプリングフィールド。

宮崎と早乙女以外の女性陣は探索用装備を準備しており、ネギはパジャマ姿で寝ぼけ眼だ。

「遅かったでござるな翔太殿。」

「何でこの時間から探索行くんだよお前ら……………」

「やったー、うちのエースが来たー」とか「やはり楓さんに電話を

してもらって正解でした。」

とか「勝負するアルよ！」とか好き勝手言ってる外野を無視しつつ呆れた声を出す翔太。

「ここに読むだけで頭がよくなる『魔法の本』があるのよ！」

「……………はあ？」

神楽坂の発言に「何言ってるんだこいつ？」と言う顔をする翔太。隣のネギ少年も初耳だったのか、神楽坂の袖を引っ張って何やらヒソヒソ話をしている。

「そーなんや、ウチらのクラスの解散の危機なんや。」

「期末テストで最下位だとクラス解散、特に悪かった人は小学生からやり直しか……………」

近衛と早乙女の発言に額を押さえる翔太。

「どーしたアルか？」

「どーしたもこーしたもねーよ……………そんな阿呆な話があつてたまるか。」

もうすぐ3年、と言うこの時期にクラス解散はまだしも小学生からやり直しか、

常識的に考えてありえ無いだろう、と。

「しかし、この麻帆良ではありえてしまうのではないのでしょうか？ この世の中にありえない事などありえないのです。」

「仮に、天文学的確立でそういう事があったとして、だ。

……………こんな事してる暇があったらその時間を勉強に当てろよ。」

翔太の言うことは正論だつたりする。

「至極」もつともな意見でござるな。」

「でも、今からじゃ勉強しても間に合わないし……………」

納得はする楓と、出題範囲を考えるととてもとてもと判断する佐々木。

「おい、担任教師？それでいいのか？」

「え？ぼ、僕ですか？」

ヒソヒソ話が終わったネギ少年に話を振ってみる。

「い、いいんじゃないでしょうか？」

「いいのかよ……………」

アワアワしながらもそう答える子供先生に、大丈夫かこの担任と翔太が思ったかどうかは定かではない。

「ところでえつと……………どちら様でしょう？」

「あ、そうだな。自己紹介してなかったな……………駒井翔太、ってんだ。翔太でいいぞ。」

そっちの事は楓から聞かせてもらってるぜ。」

よろしくな、と言って手を出す翔太。こちらこそ宜しく願いします、と握り返すネギ。

「えーと、長瀬さんの……………親戚か何かですか？」

「……………なあ、オレはいくつに見える？」

「僕と同じくらい……あだだだっ！」

ぎりぎり握手した手に力を込められるネギ。  
折れそうな痛みがネギの手を襲う。

「楓と同年だっ！」

「え、ええっ、そうなんですかつ！？ す、すみませんっ！！」

「まあ、一発で分かって言うのが無理でしょ。私だってそうだったんだし。」

謝り倒すネギに、その辺にしてあげたらと仲裁に入る神楽坂。

「と言うか、拙者も出会った時はそうでござったからなあ。」

「私事です。」

「ごめんなさい、私も……」

「そう思わない方がレアじゃないかなー。」

「もう止める……オレのライフは0だ。」

フルボッコ状態で涙目の翔太だったりする。

「それで翔太君は楓ちゃんの婚約者なんだよねー」

「ええっ！！そうなんですかつ！？」

助け舟、と言うわけではないが二人の関係を明かした佐々木の発言に再び驚くネギ。

「初めて紹介された時は驚いたアルよ。」

「クラス中がパニックやったもんな。」

思い返す古と近衛。

「まあ、そういう訳でだ。オレの楓にちょっかい出したら……分かってるよな？」

「ど、どうなるんでしょうか……」

恐る恐る聞いてみるネギ。

いやそもそも生徒にちょっかいを出すとかそんな事をするつもりはないのだが。

「……………おでんをご馳走してやる。」

「え……………」

ぼかん、とするネギ。

おでんと言うとアレである。ジャパニーズオリジナルスープである。食べたことはまだないが、話に聞いたことはある。

大根おいしいよねー、最近食べてないアルなー、とのんきな声を出してるクラスメイト達の中で

ただ1人冷や汗を流してる人間がいた。

「しょ、翔太殿……………気持ちは大変嬉しいのでござるが、それはやりすぎではござらんか。」

「どうしたんですか楓さん？」

そんな楓の様子を見て不審に思う綾瀬。

「翔太のおでん、ってそんなにまずいの？」

「いや、非常に美味でござるが……………この場合のおでんは意味合いが違ってくるでござる。」

神楽坂の問いに答える楓。

彼女曰く、この場合の『おでんをこ馳走させる』とは熱々のおでんを直接口に入れてやる、  
と言う事なのだから。

「『はい、アーン』って奴ねっ!」

「……………冷ましもしないよく茹ったおでんをこじ開けた口に投入するんでござるがな。」

「え……………」

一瞬にして場が冷える。

どう考えてもそれは喉を火傷するフラグだ。

「あわわわわわ。」

「心配すんな、考案はしたが今だ犠牲者は一人もいねーよ。」

そう、表沙汰にできる範囲では一人もいない。

あくまでも『表沙汰に』だが。

「と、とにかく時間も押してるしそろそろ出発するですよ。」

「そうね、いざ行くわよ!!」

そんな訳で、図書館島へ潜ることになった一行であった。

「で、実際どう思うよ?」

「何がでござるか?」

「『魔法の本』だよ。」

本棚の上を歩きながら翔太と楓が小声で話し合う。

「うーむ、魔法の事を考えれば実在してもおかしくはないでござる。」

「とは言え……そんな本の存在なんぞ初めて聞いたぞオレは。」

まあ、この広い麻帆良の噂話全てを網羅してる訳でもないけどな、と補足する翔太。

「そもそも誰だ、こんな所に行こうなんて言いだした酔狂なやつは。」  
「最終的にはアスナ殿でござるな。」

風呂場でのやり取りを思い返しながら答える楓。

「あいつ……魔法信じてたのかよ？」

精々占いを信じるレベルだと思ってたのだが、と翔太。

「最近ネギ坊主とも仲がよいようでござるし、ひよっとするとひよっとするでござるよ？」

「いいのかよ、それで……」

こちらが関わる話ではないが、それでも大丈夫か？と言う疑念は拭えなかったりする。

「しかし、何っーか保護者だなありゃ。」  
「そうでござるなあ。」

制服の上着を着せてやっている神楽坂を微笑ましい目で見る翔太。

「実際、アスナ殿と同じ部屋で生活しているでござるしな。」

「……………何？」

「正確にはアスナ殿とこのか殿の部屋で同居、でござる。」

「ほう……………」

翔太の目に黒い炎が宿る。

「そりやつまり、風呂は女子寮の風呂使ってるって事か？」

「そーでござるなあ。たまにアスナ殿が放り込んでる姿も見られるでござるし。」

拙者も遭遇したことあるでござるしな、って落ち着くでござるよ翔太殿っ！」

俺の女の裸を見やがったとか……………やはり今ここでもぐか、と動こうとする翔太を

慌てて止めに入る楓。

「ええい、放せ楓っ！」

「殿中でござる、殿中でござるよー！」

じたばたと暴れる二人を見て、会話が聞こえていないネギ達は「仲がいいなー」と

気楽に思っていたりするのである。

最も「やんちゃしようとする弟を止める姉にも見えるわね」とか失礼なことを考えてる者も

いるが、まあお約束の範疇である。

何とかか何とか翔太を宿め先へ進む一向、そして。

「こんな所があつたとはな……………」  
「いやあ、驚きでござるよ。」

石造りの大きな部屋。

壁には本棚が並んでいる。

数m進んだ所に祭壇のようなものがあり、そこには本が一冊安置されている。

その左右には巨大な石像が2体。

「翔太さんのお陰で予想より速いスピードで到達できたみたいです  
ね。」

「大したことはしてねーよ。」

時計を確認しながらそういう綾瀬に謙遜する翔太。  
実際、大したことはしていないのである。

「いえいえ、斥候に行つて頂けたお陰で私たちも安全に進めた訳で  
すし。」

「怪我人出すわけにもいかんだろうよ、一応不法侵入者だぞオレた  
ち？」

真夜中に公共施設に侵入して中の物を持って帰ろうというのだ。  
不法侵入どころか泥棒と呼ばれる部類である。

「あつ、あれは!?!」

本を見て驚愕するネギ。

「ど、どうしたのネギ!?!」

「あれは伝説の『メルキセデクの書』ですよ!?!」

信じられない！ 僕も直接見るのは初めてです！！」

神楽坂に問われてネギは興奮気味に返す。

「って事はホンモノ……………」

「ほ、本物も何もあれは最高の魔法書ですよ！

確かにあれならちよつとくらい頭を良くするくらい簡単かも……………」

「どーやってだよ？」

すごい、と感嘆の声を上げる佐々木をスルーしつつ疑問を呈する翔太。

「仮にあれが『本物』だったとして、だ。

『頭を良くしたい』って俗な願いを叶える魔法、って存在すんのか？」

「ええつと、一ヶ月ほどパーになりますけどモガッ！」

ぼろつと喋りそうになるネギの口を押さえる神楽坂。

「あはは、何でもない何でもないから！

そもそも私たちは今、形振りを構ってる暇はないのよ！！」

そう言つて「これで最下位脱出よー！」とネギの口を押さえて抱えたままダッシュする神楽坂。

「あ、あたしもー！」と追いかける佐々木に、「一番乗りアルー！」と二人を抜かして

駆け抜ける古。

「あの様子だと、アスナ殿にはバレてるようでござるなあ。」

「……………迂闊すぎるんじゃない？色々だよ？」

10歳児にそこまで求めるのも酷でござろう。そりゃそうだけよ、と走り出す面子を見送りつつ会話を交わす楓と翔太

「って言うかお前ら、トラップ探知くらいやってから……！」

はっ、と気がついたときには既に遅し。

祭壇へ通じる道が崩れ、その上にいた人間を下へと落とす。

「大丈夫でござるか!？」

慌てて駆け寄る楓。

幸いにして、深さはそれほどでもなかったようだ。

正確には道のすぐ下に床があったと言っべきであろうか。

「どうやら全員無事のようにござるが……」

「『英単語ツイスター』だあ？」

その床には五十音の文字パネルが描かれており、どうみてもツイスターである。

むしろ、翔太の言うように『英単語T W I S T E R   V e r 1 0 . 5』と書かれてる訳で。

「10・5って事はアップデート繰り返してる、ってことかよ？」

等と翔太が言っていると、祭壇の横に立っていた2体の石像が動き出し行く手を塞ぐ。

そして、本を欲しなければ問題に答えるのじゃ、と某セミに似た宇宙人のような笑い声を上げる。

「拙者、あの笑い声に聞き覚えがある気がするんでござるが。」

「奇遇だな、オレもあの笑い声に聞き覚えがあるよ。」

「ちよつとー！楓ちゃんも手伝つてー！！」

どう聞いてもなあ？と二人で頷きあつてゐる所で神楽坂が救援要請を出す。

流石に4人では厳しい、と判断したのであらう。

……ツイスターゲームであることだし。

「あいあい、今行くでござるよ。」

と言うわけで、ちよつと行つて来るでござるよ。」

「あー、気をつけてな。」

そう言つて楓を見送る翔太。

問題自体の難易度は低いし、ネギがヒントを出してるし、問題はあ  
るまいと判断する。

このゴーレムを叩き潰す、と言う選択肢もないわけではないが……  
まあ、平和的に本を取る取らないの話をするのならば大事にする必  
要もないだらう。

そう思つていたのだが。

「お

「さ

「らー」

「「……………」」

「……………おさる？」

最後の問題で神楽坂と佐々木が失敗したのである。

「違うアルよーッ!」

「外れじゃな、フオフオフオ。」

古の絶叫を合図にするかのように振り下ろされる石像のハンマー。  
寸分変わらず床を砕くと、その場にいた全員が落ちていく。

「って、おいっ!!」

1人ツイスターの盤上に載っていなかった翔太が楓だけでも助けようと飛び込むが既に遅し。

皆仲良く穴に落ちていくだけの結果になってしまったのである。

第七卷：馬鹿共が図書館島で夢の跡でござる、の巻（1）（後書き）

本当ならこの回で図書館島編を終わらそうと思ったんですが、  
存外に量が多くなったので分割することに。

> 2 - A

実はクラスがどこか決めてなかったりしますw  
と言うわけで 2 - A にしました。

……… 決めてなかった、よな？（おい

第八卷：馬鹿共が図書館島で夢の跡でござる、の巻（2）（前書き）

図書館島編、終了。

予め断わっておきますが、当作品はネギアンチではございませんw  
……………そのはず、うん。

## 第八巻：馬鹿共が図書館島で夢の跡でござる、の巻（２）

「何だよ、ここは……………」

首を振りながら起き上がる翔太。

辺りを見回せば、同じように気がついた楓を始めとする他のメンバーの姿もある。

そこは巨大な地下空間が存在していた。

そびえ立つ木々に、流れる川の音。

遠くには何かの建築物の姿すらある。

そして、いたるところ・湖に浸かるようにすら・本棚が存在する。

壁や天井に何か仕掛けでもあるのだろうか？地下と言うには余りにも明るい。

綾瀬曰く、「幻の地底図書室」ではないかとの事。

「地底図書室、ねえ……………そういやそんな話もあったよなあ。」

「知ってるでござるか？」

「図書館探検部なら誰でも知ってる話だよ。」

翔太の呟きを聞いたか、楓が近づいてくる。

「大丈夫かよ？」

「全く問題ないでござるな。相当高い所から落ちたと思ったのでござるが……………」

翔太に返答を返しながら天井を見上げる楓。

上を見上げれば相当高く、天井を指して登る訳にもいかないだろ

う。

「のわりにゃ、無事なんだよな。」

「…………アスナ殿が怪我してるようでござるがな。」

そんな神楽坂に何かをしようとしているネギの姿。

「大っぴらに何やってんだあいつ……………」

「まあ、見てるのは拙者たちだけでござるし問題ないでござるよ。」

しかし、なにもおこらなかった。

「の、割りにゃ何か起きた様子も見られねーな。」

「うーむ、もしかして魔法を封じてるんではござらんか？」

首を傾げる二人。

「発動判定に失敗しただけじゃねーの？」

「それならもう一度試してるでござるよ。」

「それもそーだな。」

そう言いつつ、神楽坂達の方に近づく。

「肩でも打ったか？」

「あ、はい。どうもそうみたいで……………」

「だから大丈夫だって。」

慌てて突き出していた手を引っ込めるネギと、苦笑しながら何でもないように言う神楽坂。

「そう言うが、何か問題があつてからだと遅いぜ？

打ち身だけだと思つたら折れてた、って話もあるしな。」

「切り傷から骨折まで、大体の怪我は診れるでござるよ？」

「ま、まあそこまで言うなら……………」

にゅっ、と話に加わる楓にしようがないな、と言う感じで同意する神楽坂。

なら方針定まらぬ今のうちに済ませるでござるよ、と楓と神楽坂は少し離れた所へ。

怪我を見る、と言つても袖を捲り上げる形で傷口を確認して包帯を巻くだけであるが。

「ひよつとして僕、要らない子なんでしょうか……………」

「そう思ふなら、あつちで相談してる連中の相手になつてやれよ。

担任なんだから最低でも自分の生徒くらいは責任持てや。」

そんな様子を見てずーん、と落ち込むネギに声を掛ける翔太。

実際、綾瀬や佐々木、古などがどうするべきかと頭を悩ませている。

「あいつ、割と抱え込むタイプか……………まあ、切り替えも早そうだけれどな。」

生徒達を激励するネギの姿を見ながら翔太。

「しかし結局勉強する事になるんでござるなあ。」

「何事も日々の積み重ねなんだよ。で、神楽坂の様子は？」

「落ちた時に打ち付けただけでござるな。後はちよつと切った程度でござる。」

いつの間にか横にいる楓に神楽坂の様子を聞き、そうかと頷く翔太。

「しかしアレだよな。」

ふと思い出したように呟く翔太。

「どーしたでござるか?」

「いやよ、上じゃ今頃あの辻斬りストーカーが混乱極地の極みなんじゃねーのか?」

『ああつ、こんな事なら密着警護で24時間マンツーマンしてればよかったつ!!』つてよ。」

何故か無駄にそっくりな声真似までやりながら頭を抱える演出をする翔太に苦笑する楓。

「そろそろ辻斬り呼ばわりは勘弁してあげて欲しいでござるよ。クラスメイトでござるし。」

「だが断わる。てかストーカーなのは否定しねーのかよ。」

「……………」

「何かコメントしろよっ!!」

そして翌日。

「だから、この数字をこの式に代入するとだな……………」

「おお、なるほど。」

二人は個人授業をしていた。と言つか補講である。

つい先ほどまで、ネギの青空?教室が行われていたのだが。

「で、分かったのかよ?」

「いやあ、ちと分からなかった所が……」

と言っわけで休憩時間を使つての勉強と言っわけである。

「しっかし……出来すぎだよなあ。」

「何がでござるか？」

一通り楓の勉強を見終わつてから息を吐き出すように翔太。  
そんな彼に尋ねる楓。

「いやよ、食料から教科書からトイレからキッチン、黒板まで！揃  
いすぎだろうよ。」

しかも教科書は参考書含めて全教科揃つてるときやがった。  
「確かにちと出来すぎてるでござるなあ。」

翔太の発言に頷く楓。

ふと思つて口に出してみる。

「……つまり、ここに来るまでは全て計算のうちと言つことであ  
らうか？」

「そう考えておいていいんじゃないのか？でなきゃ、ここまで準備  
してるかよ。」

トイレやキッチンはさておき、普通黒板や教科書をこんな所には置  
かないだろう。

いくら地底図書室とは言え、だ。

「と言つことは……」

「どっかに脱出の手段はある、ってこつたな。」

来ることが計算済みならば、出すことも考えてあるはずである。  
テスト対策が行えるように準備をしてあるのだ、外へ返さないとい  
う事はないだろう。

「んじゃまあ、オレはそっちの方を探してみるわ。流石にそろそろ  
帰らないとまずいだろ。」

「夕映殿は『ここは楽園です』とか言ってたでござるがな。住み着  
いても驚かんでござるよ。」

「いやいや行方不明なんだからよオレ達。」

そう言いながら立ち上がる翔太。

「では拙者も……………」

「どつた？」

「少し気分転換に水浴びでもしてさっぱりして来るでござるよ。」

……………一緒に来るでござるか？」

同じように立ち上がると楓はにつ、と笑みを浮かべる。

「いかねーよ。ついでに言つと覗きもしねーから心配しないで行っ  
て来い。」

「覗いてもいいんでござるよ？」

「いいから行ってこいつてんだっ！」

ちとからかい過ぎたでござるかな、と楓は素早くその場を去って行  
く。

そして、翔太もまたその場から姿を消したのであった。

「あっさり見つかりやがったな……………」

十数分後。

滝の裏側に隠された扉を見つけた翔太だったりする。

しかも『非常口』と書いてある事から間違はなく出口だと判断する。

余談ではあるが、この頃某子供先生が生徒達のサービスシーンと遭遇するはずであったが、

何を感じたか、ラッキースケベなイベントを自力回避すると言う偉業クエストを成し遂げる。

おでんのダイレクト投下とかマジ勘弁、と言う話だけではあるのだが。

「しつかしまあ、ここまでするか？」

扉には問題が刻まれたプレートがあつたりする。

恐らく、これを答えなければ扉は開かないのであろう。

ともかく戻って報告だな、と考えていると悲鳴が耳に入ってくる。

何があつた、と声の方を進んでみれば徐々に見えてくるのはゴーレムの巨体。

その腕には佐々木の姿、そしてゴーレムの周りには他のメンバーがいて……

「食らえ、魔法の矢！！」と指をゴーレムへ向け叫ぶネギの姿が。

だが、それはチャンスだ。

魔法が解けたのなら時間差で一撃、解けてなくともフェイントで一撃。

きっちり三つの風魔手裏剣をゴーレムの胴体へと投げつける。

不発でしーんと静まり返ったそこに投げ込まれた風魔手裏剣は狙い

違わずゴーレムの胴体に  
突き刺さり、その衝撃はゴーレムにたたらを踏ませる。  
そして、機を見た楓が古に声をかける。

「古、今でござるよ！」

「任せるアルよ！！」

以心伝心、言葉は無くとも心は一つであった。

古の拳の一撃がゴーレムの脚に罅を入れ、そこから繋がれた蹴りがゴーレムの手を蹴り飛ばす。

たまらず佐々木を手放すゴーレム。そして、落下しそうな佐々木を救出する楓。

「出口を見つけたぜっ！こっちだっ！！」

「フォッ、何じゃとー！」

その頃合を見て翔太は声をかける。

非常にアレな格好をしている一団（除く子供先生）ではあるが、今はその事は気にしない。

最優先されるのは出口を発見した、と言うことである。  
見つけられた事に驚くゴーレム。

「ちょ、ちよつと待ってや、荷物取りに戻らんとー！」

「拙者が取ってくるでござるよ。後で追いつくゆえ、先に進んで欲しいでござる。」

近衛の代わりに楓が荷物を取りに走り出す。

「このまま真っ直ぐ走れっ！その先の滝の裏側に非常口だ！！  
ここはオレが食い止める！！」

残りの面子にそう言って先に行かせる事にする。  
道は一本道な以上、迷うことも無いだろう。

「そうはさせんぞ、お主らはここで一生を過ごすのじゃー！」

「……………それはありかも知れません。」

「ねーよっ！ケツ蹴飛ばされたくないけりゃとっとと走れっ！ー！」

ちよつとだけそれもありかな、と思ってしまった綾瀬だつたりする。  
翔太にケツを蹴飛ばされるかのように走らされる羽目になるのではあるが。

そして対峙する1体と1人。

「フオ、大人しく通すのじゃー。」

「わりいが、ここからは通さんぜ？……………学園長先生よ。」

沈黙。

「ふ、フオツ、ワシはゴーレムであつて学園長とは無関係なのじゃ。」

「OK、学園長ゴーレムと命名してやるよ。」

くぐもつてはいる物の、どこからどう聞いても声は学園長そのものである。

「さて、オレの楓の裸を見た覚悟は出来てるだろうな？」

「フオっ！？ お、落ち着くんじゃ！全部見とったわけではないっ！」

翔太の眼光とその声色に、さしもの学園長がゴーレム越しに一瞬怯む。

「つまり、一部だけならばつちり見てた、つつーわけだな？」

「………… オレの楓の裸を見たその報い、10倍返して受け取りやがれっ！！」

学園長ゴーレムが反応するより早く。その次の瞬間、辺りを爆炎が彩った。

「おー、何か凄い煙が上がってるアルねー。」

「だ、大丈夫なんでしょうか……………」

一方滝の非常口の前。

ネギとバカレンジャー一行（・楓）は着替えの到着を待っていた。幾ら自分たちだけだからとは言え、流石にタオル一枚で移動は恥ずかしい。

（自称）英国紳士たるネギ少年的にも大変目の毒であったりする。

そこに爆音と立ち上る煙である。

派手なドンパチを想像して興奮する古と心配顔のネギ。

「心配ご無用でござるよ。」

「楓ちゃんおそーい。」

すまんでござる、と佐々木に謝りながら着替えの服と荷物を渡していく楓。

当然自身は着替え済みだったりする。

「本当に大丈夫なの？」

「あれで強さは折り紙付きでござるよ。拙者が保証するでござる。」  
「せやなー、運動神経ごっついもんなあ。」

心配する神楽坂にフォローを入れる楓と近衛。

「……………そうなんですか？」

「はい、図書館探検部でも1、2を争う運動神経ではないでしょうか？」

生徒達の着替えを見ないように後ろ向きのまま質問するネギに、着替えながらも綾瀬が答える。

「でも、あの煙は何だったのアルか？」

「……………ちよつとやりすぎたんでござろうなあ。」

何となく何があったかを想像した楓はゴーレムに対して黙祷を捧げる事にしたのである。

その後に關して、取り立てて語るべき事は無い。

無事に翔太は合流し、問題を一問一問解きながらゆっくりと前へ進み。

エレベーターに乗って地上へと到着したのだから。

「で、テストどうだったんだよ。」

「波乱万丈でござったが問題は無かったでござるな。そういう翔太殿は大丈夫でござったか？」

テストも終わってスターブックスのオープンカフェに翔太と楓の二人の姿があった。

「おかげさまでな。一日目が一番楽な教科でよかったぜ……………」

ふう、と胸をなでおろす形の翔太である。

地上へ到着後、現地解散の形で寮に戻ると勉強を始めたのだから。

「こっちも解散後最後の追い込みと言う事で勉強を始めたんでござるが……………」

「どうした？」

「翌日寝坊してしまったでござる。」

「笑い事じゃねーよ！」

はっはっは、と笑う楓にとりあえず突っ込みを入れる翔太。

「いやいや、結果的にテストは受けられたのだから笑い話でござるよ。」

「そりゃそうだけど……………で、結果は？」

いや、そもそもクラス解散って言うのはマジなのかよ？」

「無論翔太殿の言ったようにデマでござったが、代わりにネギ坊主が首になるならないの」

瀬戸際だったようでござったな。」

「は？」

何でも、クラスを最下位から脱出させれば正式に教員採用だと言う話だったとのこと。

それを聞いて翔太は頭を抱えてしまう。

「つまりアレか、あのガキンチョは自分が正式採用されたいから容認したのか？」

放課後使っても成績アップの為の大勉強会でも何でもやれっただ……」

「その結果が英単語……」

と言いかけて口を噤む楓。

あの件を翔太に聞かせることはネギ坊主にとっての死亡フラグ!! 流石にいたいけな少年（しかも担任）が口の中を火傷してのた打ち回るのは気の毒ではある。

「……どった？」

「い、いや何でもないでござるよ。それはさておき全教科無事にテストは解けたんでござるが、

成績発表で見事にビリだったでござるよ。」

「おい。」

はっはっは、と何とか件の件を誤魔化しつつ話を逸らす楓。

「いや、実は採点者の学園長が遅刻組の採点結果を報告するのを忘れてたようでござってな。

……しかし、どうしたんでござろうなあ？あちこち包帯だらけで痛々しい姿でござったが。」

「何で学園長が成績採点をするんだよ……遅刻だろうが採点は担任の仕事じゃねーのか？」

再び頭を抱える翔太ではあるが、後者に関してはノーコメントを貫くことにする。

まあ、大体何があったかは想像がつくであろう。そこを察するのが優しさである。

「まあまあ、サプライズしたかったんでござろう。学園長お茶目な所あるでござるし。」

「…………お茶目で済まない事もある気がするがな。で、結局の所どうだったんだよ？」

「うむ。見事2-Aがトップになったでござるよ。」

そうか、そうでござるよ。そう言って二人はコーヒーを啜る。

沈黙。

「いや、もうちょっとアクションがあるでござろう?」

「何をどうリアクションしろってんだ。集中講義の成果は帰り道の問題で証明できたんだ。」

よっぽどの事が無い限りはいい点取れるとオレは思ってたよ。」

「翔太殿……………」

思わず感動する楓だったりする。

「つーかよ、普段からそれくらい勉強して置きやがれ、勉強を。」

「いやあ、拙者が勉強嫌いなのは知ってるでござろう?」

そんな翔太の説教をにんにん、と楓は流す。

「…………甲賀中忍、それでいいのか?」

「それでいいんでござるよ。」

「いいなら構わんけどな…………ま、何にしろこれでネギ先生殿は晴れて担任、って訳か。」

「3年も賑やかになりそうでござるなあ。」

そう言いながら青空を見上げる二人なのであった。

余談。

「あ、翔太さんお久しぶりです。」

「よう、ネギ坊主。久しぶりだな。元気してるか？」

「は、はい。お陰さまで。」

「所で今大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですけど……どうかしましたか？」

「いやなに、ちょっと聞きたいことがあつてな。」

「何でしょう？僕に分かることなら何でも……」

「神楽坂から聞いたんだが『英単語野球拳』ってもんをやったんだつてな？」（静かな声）

「えっ……」（真っ青）

「さあ、行こうか？」（にこやかな笑顔で目は笑わずぼん、と肩を叩く）

「ま、待ってくださいっ！僕は決してそういうつもりでは……」

（必死）

「日本の諺にいい言葉がある。『博士、弁解は罪悪と知りたまえ』だ。」

「た、助けてー！！」

その後のネギ少年の行方について知る者はいない……わけはなく。夜、無事に学生寮の方へ帰宅した事が確認されている。ただし、3日ほど食事もなくに口を通さず、誰とも話をできなかったそうである。

それを知った某忍者は子供先生へ黙祷を捧げたと言う。

「少しやりすぎではござらんか？」

「大丈夫だ、問題ねーよ。」

大人気ないと見るかそうでないかは、当事者以外が判断することであらう。

第八卷：馬鹿共が図書館島で夢の跡でござる、の巻（2）（後書き）

次回からは桜通りの吸血鬼編。

第九卷：忍者（時々魔法使い）VS吸血鬼！桜通りの決斗！！でござる、の巻。

シリアス……………と思ったら大間違いだぜっ！（え  
相変わらずかわいそうな『闇の福音』さんの話です。

……………いや、本当に嫌いじゃないんですよ俺？

## 第九卷：忍者（時々魔法使い）VS吸血鬼！桜通りの決斗！！でござる、の巻。

吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは大変不機嫌であつた。

満月の日の前後において夜な夜な『桜通り』において吸血活動を行つてきた彼女。

理由は簡単、『サウザンドマスター』『ナギ・スプリングフィールド』によつて（でたらめな魔力でデキトーに）掛けられた『登校地獄』と言う強力な呪いを解呪する為に、その血族であるネギ・スプリングフィールドの血液を手に入れるだけの力を蓄える為である。

本来ならば真祖たる自身の事、人間には及びもつかないだけの魔力を保持しているのだが、

何故か学園祭の時期以外は魔力が常人並みにまで落ち込んでいるのだ。

魔法薬を触媒として魔法を行使するにも魔力は必要であり………結果、人の血を啜る事で魔力を補填しようと考えた訳である。

例え600年の研鑽と優秀かつ忠実な従者・茶々丸を従えていても、魔力が無ければ

ただの人間と変わらず、満月の前後でなければ吸血鬼としての力も振るえない有様である。

（その振るえる力とてフルパワーからすれば微々たる力でしかないのだが）

相手は仮にも『サウザンドマスター』ナギ・スプリングフィールドの息子。

万全の体制を整えねばならず。実際に麻帆良に来た息子であるネギを見る限りでも、

その魔力は正に父親譲りの物と言え。

これだけの高濃度の魔力を秘めた血液 - それもナギの血縁の - を使えば『登校地獄』も

確実に打ち破れるに違いない、と確信を得るだけのものはあった。

そしていよいよネギ・スプリングフィールドをおびき出すべく、彼の関係者 - つまり自身のクラスメートになる訳だが - を狙うことにしたのだ。彼の性格からすれば痕跡さえ残せばまず間違いなく行動を起こす。そう睨んで。

吸血による魔力量の観点から言えば近衛木乃香辺りは超優秀なのではあるが。

流石に学園長<sup>ジンイ</sup>の血縁を狙うと後々ややこしい話になる。

護衛の桜咲刹那も煩くなる事ではあるだろうし。

そんな訳で、たまたま夜に歩いていた佐々木まき絵を狙ったのだが

..... 邪魔されたのだ。

邪魔した相手はやはり同じクラスの長瀬楓。当人は否定しているが立派な忍者である。

最近になって裏の仕事 - 正確には外敵からの学園警備 - に関わり始めたようだ。

顔合わせの機会もあったのだが、話だけ聞いて行かなかったのだ。面倒くさかったし。

最も、正確には目にも止まらぬ早業でまき絵を回収され、分身を置

いて逃走されたのだが。

正直な話をすれば分身の出来は感心するほどで。

あそこまで密度のある分身を完成させるとなると、相当な修行を積んだに違いない。

何しろ、自身も一瞬本体が分身が判別できなかつたくらいである。

これが本体ならば正体までバレて後々やりにくくなったのではあるが、幸か不幸か自身の顔を

見たのは分身の方。ならば情報の共有が無い以上は正体がバレた訳でもなく。

何より今日一日様子を見て、自分への視線はなかった事をみると問題は無いだろうと判断。

尚且つ、佐々木まき絵の証言により『桜通りの吸血鬼』の脅威はネギに情報として伝わり。

恐らくは今日当たり、夜回りを決行するだろうと踏んでいる。

万が一来なければ………来月まで予定を延ばさざるを得ないのだが。

そんな訳で、今日も『桜通り』にて待ち伏せてる………もとい獲物を待ち構えている所である。

無論、誰も通りかからないと言う可能性はあるが、夜間外出禁止令が出ているわけでもなく、

魔法先生・生徒の類が巡回している訳でもない。

恐らく学園長<sup>ジンイ</sup>辺りは察しているだろうが・愉快犯ではあるがボンクラではない・

この私を踏み台にさせる気かとも考えるが、どの道避けては通れないのだ。

15年。

吸血鬼、それも600年生きた自身からすれば決して長い年月ではない。

しかし、だ。その15年間で呪いの為に延々と女子中学生としてノテンキな連中と過ごす日々。

最初の頃こそ、それは新鮮な感覚であり毎日が新しい発見の連続であつた。

しかし、もはや苦痛以外の何物でもないのだ。

繰り返される3年間、一人だけ同じ場所をループしているような感覚。

呪いを解除しようにも、その膨大な魔力と適当な術式はそれすらも困難にし。

唯一呪いを解ける術者<sup>ナギ</sup>は風の噂で死んだと聞いた。ならば、その息子の血をもって呪いを解除する。

しかし、呪いを解いて自由になったとして。

籠から外へ出た鳥は、どこを目指して飛べばいいのだろうか？

そこまで考えて、ふつと現実に戻る。

少女の声を耳に捕らえたからだ。

その方角には、こちらへ歩いてくる生徒の姿。

俯きがちで、前髪で顔を隠した一人の少女……宮崎のどか。

何かを口ずさみながら、おっかなびっくりと言った様子で『桜通り』を歩いている。

丁度いい。今日の獲物はお前にしよう。

『彼女』が気がついた時、『それ』は街灯の上にいた。

黒いとんがり帽子に、黒いマント。まさに『魔女』を体現するような出で立ちで。

話に聞く『桜通りの吸血鬼』とはまさにアレの事だろうか？

一瞬たじろいだ『彼女』に黒き吸血鬼は告げる。まさに死の宣告を下すかのように。

「27番、宮崎のどこか……悪いけど、少しでもその血を分けてもらうよ？」

そう言っただけで飛び掛る『吸血鬼』。翻る黒いマントは翼のようで。

『彼女』が何かするよりも早く乱入する一陣の風。

「待てーっ！　ぼ、僕の生徒に何をするんですかー！」

杖に乗って空を飛び、『戒めの矢』を放つネギ・スプリングフィールド。

攻撃力も低く、相手を捕縛する事に特化した11発の魔法の矢。

それを迎え撃つべく振り返り、魔法薬を触媒にし『氷盾』を発動させようとする吸血鬼<sup>エヴァ</sup>。

だが、予想外の出来事が彼女を襲う。

魔法薬を取り出す一瞬のタイミングとまさか、という思いが判断を鈍らせて。

さらに言えば背中を向けた事が致命的で。

『彼女』が前へ踏み込む。かつん、と言う音。

踏み込みと共に放たれた一撃を、吸血鬼<sup>エヴァ</sup>は対応することすらできず。魔法障壁すら打ち抜かれて背中<sup>エヴァ</sup>の急所に一撃を貰い、悶絶する吸血鬼<sup>エヴァ</sup>。

「うわぁ……………」

そこからの行動は、さしものネギも咄然とするしかなかった。  
すかさず吸血鬼<sup>エヴァ</sup>を羽交い絞めにしたかと思えば、空へ舞い上がったのだ！

当然、人が空を飛べる訳も無く。真っ逆さまへ下へと落ちていく。

「これぞ『忍法・百舌落し』ってな？」

落ちていく瞬間、その声が吸血鬼<sup>エヴァ</sup>に聞こえた……………気がした。

地面に激突する形で叩きつけられたのは吸血鬼<sup>エヴァ</sup>のみ。  
それも頭部から埋まるような形で。

そして、同時に着弾する11本の『戒めの矢』。

……………こうして、哀れ吸血鬼<sup>エヴァンジェリン</sup>は大変みつともない姿になったのである。

足を突き出して頭から地面に埋まる形で尚且つ『戒めの矢』でぐるぐる巻き状態なのだから。

ネギ・スプリングフィールドは驚愕していた。

クラスで話題になった『桜通りの吸血鬼』。

昨日の晩も担任クラスの生徒である佐々木まき絵が襲われたと言うのだ。

間一髪、同じクラスの長瀬楓が助け出したそうなので、何も無かったのが救いだっただが。

とは言え、そのままにしておく訳にも行かないだろう。

正体こそ不明ではあるが、本当に『吸血鬼』ならばまたクラスの生徒が襲われる可能性もある。

そんな訳で今日は晩御飯いらないと言い残し、夜回りに出た所で生徒である宮崎のどかが

『桜通りの吸血鬼』と思しき影に襲われている所を目撃し介入に至ったのであるが……

正直、想定外で思考が追いつかないというのが実情である。

誰が想像するだろうか、まるで熟練の兵のように相手を撃退した宮崎のどかの姿を！

「す、凄い……………」

としか言いようが無いのだ。

そんな彼を見て、宮崎のどかがこちらを見る。

「よう、ナイスアシストだったぜネギ坊主。」

「……………え？」

聞こえてきた声は明らかに男の物であり。

そして、聞き覚えのある声である。

「しよ、翔太さんです……………か？」

「おうよ、まさかこんなにあっさり行くとは思わなかったぜ。」

恐る恐る尋ねると肯定の返事。

それと同時にばっ、と制服を剥ぐと出てくるのはいつもの私服に身を固めた駒井翔太の姿。

違うのは履いているのが高下駄だ、と言うことだろうか。

「あのおう、一体どういうことなんでしょうか……………」

例の件以来、若干の苦手意識があるのか引け腰で尋ねるネギ。

何故彼がクラスメイトの変装をしてこんな所でこんな事をしているのだろう？と。

「いやな、楓の奴から『吸血鬼が桜通りに出没してる、』と言うか出会った』って話を聞いてな。

放っておいて楓にちよっかい出されたくもねーし、知ってる顔が襲われるのも目覚め悪いしよ。

変装して捜査でもやるかと思ってみたら案の定と言う奴さ。」

高下駄を脱いでどこに仕舞っていたのか運動靴に履き替えながら答える翔太。

実際の所「『桜通りの吸血鬼』に関しては手出し無用」の通達が届いているのだ。学園側から。

この件はネギ・スプリングフィールドの試練の一環であり手出しする事ならず、と。

エヴァンジェリン自体が女子供は殺さない、と公言しており尚且つ血を吸われて吸血鬼化

した所で解除も難しい物ではない。

真相を把握している学園長からすれば、ネギへの丁度いい教材とも言える物なのだ。

ついでにエヴァンジェリンのストレス発散にもなり一石二鳥である、と言う考えである。

それに、仮にネギが破れて『登校地獄』の呪いが解けた所で今更賞

金首生活に戻るわけも無いだろう、と言う見込みもある。その時は改めて話し合えばよい、と。

無論、そこまでの事を知るよしもない彼は「そんな通達見てなかった」と介入したのだが。

「それで、その衣装とかは………？」

「あ、これか？あんまり気にすんな。つか企業秘密と言う事で頼むぜ。」

さらりと答える翔太。

忍足る物、変装の一つや二つ出来て当然である。

………彼の場合、身長がとことんネックになるのだが。

今回の件に関しては高下駄を履いて身長をカバーしたのだが。

「でも何で宮崎さんに？」

「特に理由はねーな。あえて言うなら身近の人間で身長が限りなく近かったからか？」

「いえ、疑問に疑問で返されても………」

「それにこの手のタイプなら狙つてくると思つたしな。」

本物の宮崎のどか（+図書館探検部）には夜は外に出ない方がいい、と忠告してある。

部活動自体も早めに切り上げるように誘導し、寮までの見送りまでフォロー済みである。

寮の方も万が一に供えて楓に警護を依頼している訳で。

「さて、後はこいつをどうするかだな………まるで『犬神家』だぜ。」

「『犬がミケ』?」

拘束されているからなのか、激突の衝撃で気絶しているのか。はたまた既に息をしていないのか。あられもない姿で地面に突き刺さっている吸血鬼を

見ながらこれからの対応を考える翔太。

そこで出てきた謎の単語に首を傾げるネギ。犬なのに名前がミケとはどういう事だろう?

「いや、発音がおかしい。『いぬがみけ』だ。」

「『イヌガミケ』ですか?」

「……微妙に発音がおかしいけど、大体それであってるし良いだろ。」

「それで、結局何なんです『イヌガミケ』って?」

そんなネギの疑問に答えてあげることにした。

「『いぬがみけ』と言うのは犬神さん家の3姉妹の日常を描いた漫画でな。」

おつとりのほんとした不思議系長女と、しつかりもので運動神経抜群だがプレッシャーに弱い

次女と、現実的でちょっと金に煩い三女、それに出張で滅多に帰ってこない父親とメスなのに

オスの名前がついた飼い犬の心温まるホームコメディ、って奴だ。」

「……………これとは全く縁が無さそうなんですけど?」

ちら、と『これ』を見ながらネギ、

今の話の中で頭から地面に突き刺さってる人間が出てくる図、と言  
うのが全く思い浮かばない。

そうこうしていると、『戒めの矢』の効果時間が過ぎたのか拘束が解ける。

同時にようやく重力があることを思い出したかのように垂れ下がる衣服。

幼いながらも艶めかしい白い足や下着がまる見えの状態で、

（自称）紳士のネギとしては眼を逸らさざるを得ない。

しかし、本人が倒れる様子が無い辺りどんな突き刺さり方をしてるんだろうか？

「まあ、コメディだしな。そんなシーンもあるんだよ。

気になるならアニメにもなってるし、レンタルビデオでも探すとい  
いと思うぜ？」

「わ、わかりました……………そうします。」

そこに走り来る影。

ふっ、と翔太とネギが振り向いた時には既に遅く。

「何また嘘ばつか付いてるのよっ！」

「げふっ！！」

神楽坂明日菜の飛び蹴りか翔太にダイレクトヒットしたのである。

「い、痛ってえ……………顔が蹴られたみたいに痛えっ！！」

「見たいじゃなくて蹴飛ばしたのよ、じゃなくて何ネギに嘘八百教  
えてるのよ！！」

幾ら私でも『犬神家の一族』くらい知ってるんだから！！」

数m転がってから痛がる翔太に綺麗に着地まで決めた明日菜が吠え  
る。

「あ、あのー。アスナさんどうしてここに？」

「何言ってるの、いつまで経っても帰ってこないから心配で探しに来たんじゃないの!!」

おどおどと質問するネギに矛先を変えて吠える明日菜。  
実際時計を確認してみれば、良い感じに時間も過ぎて。

「とにかく、晩御飯も食べてないんでしょ？木乃香が夜食作ってくれてるから帰るわよ？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいアスナさん！あれをどうにかしたいと!!」

腕を引っ張って帰宅を促そうとする明日菜に、突き刺さったままの吸血鬼を指差すネギ。

そっちの方を見て驚く明日菜。

「な、何よあれー!？」

「今頃気が付いたのかよ……『桜通りの吸血鬼』だよ。」  
「どどどどうなってるのよ？」

何故にそんなものがこんな所で突き刺さってるのか。  
そんな彼女に大雑把に説明するネギ。

「と、言う訳なんです。」

「へえ、凄いわね翔太って……ってちょっと!？」

慌ててネギを抱えて翔太から離れ、耳打ちをする。

「思いつき翔太に魔法ばらしちゃってる状態じゃないのこれ？」

「あ……………」

今になってそれに思い立ったのか、真っ青になるネギ。

スーパー魔法大戦を目の前で繰り広げたような物である。CGと誤魔化す訳にも行かず。

「おい、今になってそれを言うのかよー？」

翔太からすれば物凄い勢いで今更の話で。

と言うか、今までそこに触れなかったのがびつくりの話だ。

……………まあ、こっちから話を振るつもりも無かったのだが。

「そ、その翔太さん、今日のこの事は……………」

「その話は後にしようや、今はこいつをどうするかなんだってよ。」

何しろバレたらオコジョである！びくびくしながらお願いするネギ。だが、翔太的には凄いでどうでもいい事で。

いつまでもこのままにしておく訳にも行かない『桜通りの吸血鬼』の処遇を考える必要がある。

「どうすると言つても……………警察に突き出すとか？」

「吸血鬼ですつてか？病院に連れて行かれるぜ？」

「そうよね……………ネギ、何か良い方法ある？」

神楽坂にそう聞かれ、考え込むネギ。

魔法関係者、それも悪い事をする魔法使いである以上はそのままと言う訳にもいかず。

とは言えこのようなケースは彼にとっても初めてのことであり。

「吸血鬼、って白木の杭が効くんだったっけか？」

「ちよつとちよつと、何する気なのよ!？」

どこから持ってきたのか、木の枝を削りながらそう言う翔太。物凄い嫌な予感を感じる神楽坂。

「いえ、取りあえずは学園長に話を持って行つて……………」

「申し訳ありませんが、それは勘弁願えないでしょうか?」

一先ず無難な所で落ち着かせよう、と出したアイデアは新たに現れた一人に遮られる。

「あ、あなたはっ!」

「茶々丸さん!？」

「こんばんわ、ネギ先生、神楽坂さん。それに……………」

「よう、すげえ久々じゃねーか。」

現れた彼女に手を上げて挨拶する翔太。

お久しぶりです、と現れたのは絡繰茶々丸。エヴァンジェリンの忠実な従者。

「お久しぶりです。猫たちも元気ですよ。偶には顔を見せてあげてください。」

「あー、わりい。ここんとお前が面倒見てるって思ったら行くのが面倒になつてな。」

ここ最近、猫の餌やりをさぼり気味だった翔太が頭を掻きながら苦笑する。

彼女が欠かさず餌をやってるだろうと信用しての事なのだが……………無責任には違いあるまい。

「って、何とんだのよ!? それに何で茶々丸さんが!？」  
「そ、そうですよ! もしかして…… 『桜通りの吸血鬼』と関係が!？」

いきなり和みモードの二人に突っ込みを入れる明日菜。

ネギとしても、自分のクラスの生徒が悪事に加担しているのは見過ごせないわけで。

「はい、私のマスターですので。」

そう言いながら地面に突き刺さった『それ』に近づくと思いつきり引っこ抜く。

ぼん、と言う音が聞こえたような気もしたがきつと気のせい。

「あ、あなたはエヴァンジェリンさん!！」

ネギが驚くのも無理はない。

土まみれで未だ絶賛気絶中の『桜通りの吸血鬼』はやはり同じクラス  
の生徒である

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルその人だったのだから。

「じゃ、じゃあ『桜通りの吸血鬼』ってエヴァちゃんだったの!？」  
「よく分からんが、そーなんじゃねーのか？」

さつきから驚きっぱなしの神楽坂に、吸血鬼と言う割にはよえーよ  
なと思う翔太。

無論、決して吸血鬼が弱いわけではないし翔太が油断をしていたつ  
もりもない。

ちとやりすぎたか?と思う程度で丁度良かったな、と言う程度の認  
識である。

「しかし、世間狭すぎるだろ……………」

ぼやく翔太だが無理はない。

今この場にいる人間のうち、一人を除いて全員顔見知りと言う状況なのだ。

3 - A (旧2 - A) の生徒とは学園祭の時に顔を合わせているのだが、エヴァンジェリンと

茶々丸に関しては丁度その場にいなかったので、同じクラスだとは知らなかったのである。

猫の餌やりの時にそういう話をしなかった事もあるわけだし。

「それでは失礼させて……………」

「ちょ、ちよつと待ってくださいっ!!」

エヴァを抱えたまま去っていくべく足のロケットを噴かそうとする茶々丸を止めるネギ。

このまま去られては意味が無いのだ。

「?……………どうかしましたか?」

「どうかしましたじゃありませんよ、何でこんな事をするんですか!!」

魔法とは世の為人の為に使う物。

魔法使い〃正義の味方、と言う固定観念を持つネギからすれば、その魔法で持つて

人を襲い血を啜るなどという悪事を見過ごすことは出来ない。

「そ、そうよ! 幾らクラスメイトだからってそんな事していいわけないでしょ!!」

身近なクラスメイトが襲われているのだ。  
神楽坂としても人事ではなく。

「残念ですが、それに関してはお答えすることができません。」

しかし、茶々丸にそれを答える権利は無く。  
例えあったとしても口を噤んだであろう。

「答えられないというのなら……………」

「ちよつと待った。」

自身の生徒であつても、と悲壮な覚悟を決めるネギに割り込むのは  
翔太であつた。

「ちよ、ちよつと何で止めるのよ？」

「いやよ……………ここは一旦双方ひかねーか？このままだと不毛な争  
いになるぜ？」

改めて後日仕切りなおしていいと思うがね。」

頭を掻きつつそういう翔太にネギが反論する。

「な、何言ってるんですか。僕の生徒が悪い事をやってるんですよ  
！？」

「いやよ、誰も見過ごせとは言つてねーよ。

お前としても物理的にぶちのめすのは本意じゃねーだろ？」

「それはそうですけども……………」

でなければ『学園長に話を』と言う台詞は出てこないだろう、と翔  
太。

確かに生徒に手を上げるのもどうなのか、とは思っネギ。  
ましてや片方は完全に目を回して気絶状態である訳で。幾らなんでも気が咎める。」

「そっちの……エ、エヴァンゲリウムにしたって今日は活動不可だろうしな。」

「マスターの名前はエヴァンジェリンです。」

長い横文字が苦手なのか名前を間違える翔太だったりする。

「明日の放課後にでも、スタブ辺りで話し合いつて事でどうだ？  
もしかしたらそいつで分かり合えるかも知れねえ。血を吸ってる理由だってわからねーんだろ？」

「……… 思いっきりやらかした人間とは思えない台詞よね。」

ジト目で翔太を睨む神楽坂。

「あれは正当防衛だ。」

「嘘は言ってませんけど………」

きつぱりと言い切る翔太。

確かに間違ってないが、図捜査で正当防衛もへったくれないんじゃないかなあ、と思うネギ。

「つーわけでどうよ？」

「私の一存では決めかねますが、マスターが気がつきましたらお伝えしたいと思います。」

「……… ですので、この『糸』を外していただけるとありがたいかと。」

あくまでも従者である茶々丸に決定権は無く。  
忠実に主人に仕えるだけなのだから。

「いや、わりいわりい。逃げられても困るしな。

もし来ない場合は、しかるべき筋に通報するとだけは言っておいてくれ。」

「畏まりました。では、おやすみなさいませ。」

悪気の無い声で絡みつかせていた糸 - と言ってもワイヤーなのだが - を解くと、

結局目覚めることの無かったエヴァンジェリンを抱えたまま、飛び去っていく茶々丸。

それを見送りながら、ネギと明日菜は同時に呟いたのである。

『茶々丸さん、ってロボットだったんだ（だったのね）……………』

「いや、何で気がつかないんだよお前ら。」

夜空に翔太のツツコミが小さく響いたのであった。

第九巻：忍者（時々魔法使い）VS吸血鬼！桜通りの決斗！！でござる、の巻。

ネギの登校拒否フラグが消滅しました！

ネギ君を慰めると言う名目の逆セクハラ会が消滅しました！

水着を脱がして回る淫獣（仮名）が涙目です！

茶々丸を二人でぼこる作戦が消えそうです！

再びへこんだネギの脱走フラグが消えそうです！

楓さんとのうれしはずかし山での混浴イベントが消えそうです！

ここ重要

と言うわけで次回はお話の予定です。

人間スペックにまで落ち込んだエヴァンジェリンさんに断わる理由  
と云うか、

提案を蹴るメリットが無いわけでした……………。

無論、停電の日に電力結界を落として元のパワーを取り戻せば別でしょうが。

とは言え、端からそれを知ってたわけでもないですからねえ。

……………と云うことにしてくれると大変嬉しいですよ（何）。

>そんなエヴァンジェリンさん

3巻によると満月を過ぎると魔力ががた落ちになるそうです。

牙すらない以上スペックはほぼ人間で（まあ、花粉症やら風邪やらなるわけ）。

侵入者の感知は結界の効果みたいですし……………しかし、そんな彼女に侵入者探させていいのか？

万が一グロンギとかオルフェノクみたいなのが来たらどうする気だ？（笑）

じゃあ、満月時の戦闘スペックはというとネギとの戦闘でも魔法をレジストしきれてない

わけで（マントが吹き飛んで下着一丁ならまだ抵抗し切れてるのか？ なわきやねーよな）。

ネギの魔力が高い、と言うのを差っ引いても本当に大丈夫か？

戦いなれてる訳でないネギですら「魔力が弱い、勝てる！」と言えるくらいだしなあ。

（多分に慣れてない上での油断・慢心もあるでしょうが。戦闘経験だけならエヴァ圧勝だし。）

まあ、魔法薬を触媒にして魔法を行使する辺りで魔力の低さはお察しですが。

そのための前衛である茶々丸でしょうけども。

エヴァ的には魔法使いは砲台、って感じみたいだし。

最悪合気道が火を吹くだろうしなあw

閑話休題。

満月を過ぎるとがた落ち、と言うことは夜中に襲えるのは月1回。

幾らなんでも満月前後はいけるだろう、と思ったもののエヴァが牙が無いのを見せるのは

襲撃の翌日な訳で……………この時点で既に吸血鬼としては終了してるという。

無論、魔法使いとしての魔力は吸血行為でばっちり、と言う可能性はありますが。

しかしそれだと襲つても血は吸えない訳で……………結局月1回しかないwww

2月の半年前（赤松研より）と言う事は8月くらいから吸血活動を

開始したそうですが、

月1と考えると9回の吸血を行った事になるわけでした。

……… まあ、一応噂話に上がるレベルではあるのか。同じ場所であれば。

とは言え毎回満月の夜に血を吸われてるとなると何で捕まらないんだ、って話にw

1回目2回目はともかく、4回5回となっても魔法先生方が動かないのはボンクラだろうとw

下でも書いてるけど「危険を冒して」と言う事は内緒でやってるにとだろうし。

学園長は知ってる可能性もあるけども。

割りとSSである「壁になってやってくれ」と言う依頼ですな。

だとすると、上からの圧力で調査しなかった可能性もありなのか。

それはさておき。となるとまき絵の血を吸ったのはいい。のどかの時はどうしてたんだ？

やっぱり満月から前後1日は何とかなるんだろうか。

と言うかそうでないとネギから血を貰えない。

満月1日前：

満月当日 ：まき絵襲撃

満月一日後：のどか襲撃

のようなスケジュールなら話とも矛盾しない訳で。

そついう訳で当作品は前後1日は吸血鬼として活動できることとします。

……… まあ、ここでしか使わないような設定ですがw

しかし、そう考えるとエヴァさんが学園警備でオリ主と言う名の不

審者発見した上で

戦闘してお話、と言うテンプレは使えなくなってしまうな……………  
たまたま満月だった、はいいいけどスペック的に凄く不安と言うか。  
吸血行為により魔力は充填されると考えても……………なあ。

ピンチの所をオリ主さんに助けられる役なら問題ないだろうけどさ  
あw

しかし実際、吸血行為で魔力は充填できるんだろうか吸血鬼。  
出来なきや問題と言う気もするけど、散々吸血行為を繰り返してあ  
の魔力でネギと戦った、  
と考えると微々たる量なのか、と言う感じもある。

無論、月3回の吸血で莫大な魔力を得られるのもおかしい話ですが。

血液はただの嗜好品でネギをおびき出す為の手段として就任半年前  
から事件を仕込んだ、

と言うのもありなのか。

来るといつのを知ってると言う事は、最低限の人となりくらいはリ  
サーチできてるだろうし。

あくまでも解呪に必要なのは「血縁の血」と言う触媒であって魔力  
は関係無いとか……………

と思ったけど、8巻で吸血で魔力補充してるんだよなあ（献血程度  
の）。

そもそも3巻の段階で「ひよっこ魔法使いのお前に対抗する為に危  
険を冒して学園生徒の

血を集めた甲斐が」と言ってるし……………。

やはり魔力が封印されてる分を吸血で集めたと考えるのが妥当なの

か。

しかしそうすると、今度は封印時の満月の時のスペックが非常に弱い事になってしまう……。

吸血行為で半年間血を集めた魔力+満月時の吸血鬼スペックで挑んで負けかけてるし。

手加減する理由もねーしなあ。あえて言うなら慢心ゆえの油断だろうけど。

……連載当初と今じゃ設定が別物、と言われればそれまでなんだけど。

そこまで戦闘力をインフレさせるつもりは無かったと言う事なのか。

と言うか俺は作品書こうとして何でここまで考えてるんだ？（おい

>分身

本当にどこまで出来るんだろうかw

幾らなんでも情報の共有は出来無いだろう、と思ってますが。

>ネギVSエヴァ（1回戦）

（のどか・エヴァ）遠距離（ネギ）と言う初期配置からのスタート。

丁度エヴァの後ろにのどかが倒れてる、と言う状況ですね。

しかし、戒めの矢を撃ってそれを氷盾で弾いた時にはのどかをカバーできる位置にいるという。

呪文を発動したのはエヴァの後ろ。しかし防いだのはのどか側……

……どーなってるのさ？

エヴァの背中に着弾するように撃ち込んだ、と言っなら別でしょうけどさw

と言っわけで若干弄っっております。  
ご都合主義とも言っ。

> みつともないエヴァンジェリンさん  
矢の飛ぶスピード考えるとまにあわねーだろ、とも思っでしようが  
気にすんな(え

> 高下駄  
30cmほどフォローする必要があるんですけどねw  
まあ、大丈夫でしょう忍者だし(何

> 犬神家  
もし分からない方は仮面ライダーベルデのファイナルベント・デス  
バニッシュを喰らった後を  
イメージしていただければ分かりやすいかもしれません。

どっかの突っ込みであったな。大型ミラーモンスター相手にあのフ  
ィナルベントは  
どうやって決めるつもりでいるんだろっ、っていうのw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1407o/>

---

麻帆良に忍！

2011年7月30日22時11分発行